
転生者人生録 I S 編

Shion

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

転生者人生録 IS編

【Nコード】

N4498R

【作者名】

Shion

【あらすじ】

転生者の男オリ主がもう一人の男性IS操縦者として原作をつつくお話。

【世界】を外から眺めている青年がいた。青年は【世界】の中に入りたかった。しかしそれはかなわなかった。そこで青年は【世界】の中の魂に自分と同じ存在になってもらいリンクすることで【世界】の中に入ることにした。

これは一度一度の生を大切に懸命に生きる転生者の物語。

*タイトルを【IS>インフィニット・ストラトス< 一生一生を大切に生きる転生者】から変更いたしました。

プロローグ

「ここは?……」

青年は気が付くと目の前に広がる真っ白な真っ白な空間を見てそう呟いた。

周りを見回しても白しろしろ。

「何にもねえな……ッ!?」

彼がそう呟いた次の瞬間、目の前3m先の空間が波の立っていない水面に石を投げ入れたときのように波紋を描き始めた。

コツコツコツとその目の前の波紋から音が聞こえてくる。

音は次第に大きくなりそして波紋が一際大きくなったと思ったら、そこから一人の青年が現れた。

「んな……!?!」

彼はこの空間に新たに現れた青年を見て驚いた。

否、驚かざるを得なかった。

青年は指して珍しい顔をしているわけではなかった。

髪の色も瞳の色も黒。

髪型は合体剣をぶん回し、再び現れた英雄を思い出の中に眠らせた救星の英雄をリスペクトしている。

目はやや釣り目、目蓋は奥二重、眉は濃くそれが若干眉を太く見せている。

顔の形も美形に多いとされる所謂逆三角形型。

肌の色は白くも黒くも無い典型的な日本人がもつ肌色。

パーツごとの配置も悪くは無く、このレベルだったら結構な数があるがなかなかいい顔つきの男だと言えるだろう。

青年は指して珍しい格好をしているわけではなかった。

身長は179・10cm。

ジーンズを穿き、黒い生地にしロで何らかのデザインをされたシヤツを着てその上に白と紺とその中間色でデザインされたチエツクのストライプカジュアルシャツをボタンを留めずに羽織っている。靴は茶色のハイカットスニーカーで見えないがきつと靴下は黒だろう。

ここまでは特におかしな点は無かっただろう。

青年を見たのが彼以外であったならばおかしな点は何一つ無かっただろう。

だが青年を今現在目の前に見据えているのは彼なのだ。

彼にとって青年の姿、否、存在は異質すぎた。

なぜなら……

「何で俺がもう一人いるんだ?!」

青年の姿は彼と瓜二つだったのだから、そう服装まで同じだったのだ。

「だいぶ驚いているみたいだな」

青年はしょうがないかと苦笑しながら彼に話しかけた。

「あ、ああちょっと、いやかなり驚いてる。表情に出ている以上に内面はパニック状態だ。」

「まあいまからいろいろと説明すつから。質問は一番最後になる、わかるだろ？」

彼はその言葉にはつきりと頷いて青年が説明を始めるのを待った。

「じゃあまずは、お前の最後の話からだな」

そう切り出して青年は彼に説明を始めた……

青年の話は彼にとって十分に納得がいく話であった。

実にシンプルな話で、彼は死にそしてこの空間に青年に呼ばれて来ることになった。

そんなことをやってのけた青年は別に神様とか言われるような存在ではなく、ただ【世界】と言う枠組みの外にいただけの存在らしい。

そんな青年は外から【世界】を見ているだけではつまらないので自分も中に入ろうとしたことが有つたらしい。

だが青年が【世界】に入ろうとするとその【世界】が青年の存在に耐え切れず壊れてしまう可能性が出てきた。

そこで青年は自分の魂を分けて入ることを思いついた。

しかし魂を分けると言う行為はとてつもない激痛を伴う行為であり又、自身の存在そのものを危ぶませる行為でもあった。

そこで彼は魂の極々一部だけを切り離しそれを【世界】に存在する魂達に付属させそれらが育ち自分という存在に近づくのを待った。

その数、一年に100人分。

ここで疑問となるのが魂の分割は危険ではなかったのか？と言う点だ。

最初に言った魂を分けると言う行為は言ってみれば、腕や足を切り落とすといった行為にあたり。

次に言った魂の極々一部だけを切り離す行為は髪の毛を抜くようなものなのだろう。

なるほど、それなら確かに後者は可能だろう。

しかし青年の魂が付属した魂が必ずしも青年に近い存在となるわけでは無い。

むしろその可能性すらかなり低いようだ。

だがしかし、うまくその存在と青年との一致率が95%を超えた場合。

その存在は死後、青年に呼ばれこの空間に来ることになるということらしい。

彼が青年を初めて目にしたときに、青年に誰だ？や、どうして俺の姿をしている？等と聞かずに俺がもう一人いると言った理由がそこにあった。

彼と青年はほぼ同一の存在だ。

魂の大きさこそ違うが、見た目から思考までそれらのすべてがほぼ一致する。

数学の相似だと考えればいい。

だからこそ彼は青年が嘘を付いていないと判るし、青年がどういう存在なのか解り、それらを受け入れることができた。

因みに年齢による一致率の低下は小さい範囲でなら修正が利きくらしい。

つまるところある程度の小さい範囲の年齢で死なないと、その範囲の年齢での一致率が95%を超えていてもここに呼ぶことができないらしい。

なんとも世知辛いことだ。

さてここで青年がそもそも何故そんなことをしたのか、この話に戻る。

？青年は【世界】の中に入りたかった。

？だが、【世界】の外の魂である青年が存在の大きさからそれが叶わなかった。

？そこで【世界】の中の魂に自分に近い存在となってもらい、青年として【世界】の中ですごしてもらおうとした。

もちろん青年の提案を断ってもいい。

その時は付属している青年の魂を回収したのちそのまま【世界】の中へ帰り、輪廻するだろう。

しかし、彼は青年の提案を受け入れた。

これはほとんど当然の結末だろう。

なぜなら彼は青年で、青年は彼なのだから。

「さて、最後の仕上げに入ろうか。今からお前と俺の一致率を100%にする。これでお前は【世界】の中の魂をもつ俺になる。【世界】の外の魂を持つ俺とは違い【世界】の中で過ごす事のできる俺だ。」

「そして俺は【世界】の中で俺という存在を保ったまま生まれ変わるって事か。しかも俺が生きていた世界じゃなくても異世界でもいいと……」

「そう、お前がいた世界もそこから見て異世界も【世界】の中であることには変わらないからな。」

「くーーーーー！楽しみだ。さっさと仕上げて【世界】の中に行こう

ぜ！
「

「よし、じゃあ仕上げと共にサクッと行くとするか！」

「さあ、新しい世界よ待っている！」

第1話

俺の名前は 戦場いくさば 勝生かっせい 転生者だ。

この世界で新たに生を受けて15年やっこの日が来たというベ
きか。それにしても新たな局面を迎えると言うのは何度生を重ねて
も楽しみでしかたない。正直ここまでことが上手くいくとは思わな
かったんだけど、まあそんなことはどうでもいい。

俺は今日からこの学園に入学する。そつと左手の黒と銀のカラー
リングの時計を触り顔を上げ大きく息を吸いゆっくりと吐く。

ここに来たことで軽く興奮しているのだろう気持ち深呼吸で落
ち着かせる。

にしてもここで待つていれば迎えが来ることになってるって話だ
ったのだが、いったいどうしたのだろうか？ まあ予定の時間には
まだ後5分ほどあるが、普通こういうときは迎えが早めに来ている
ものではないのだろうか。 とりあえず時間になっても迎えが来な
いなら門の所にいる警備員さんに聞いて自分で事務室あたりに行こ
うと思うが、できればまだこの学園の中を一人で歩き回るのは回避
したい。

そんなこんなで5分後、時間ちょうどに緑の髪でめがねをかけた
女性がこちらに慌てた様子で走ってきた。

「ごめんなさい！ 本当は先にここに来て待つていたかったんだ
けど他にも転校生がいて手がまわらなくて……怒ってるかなあ？ 怒
らないでくれると嬉しいなあ」

「いえいえそんな怒ったりしませんよ？ まずはご挨拶を、本日よ
りこちらの学園に通うことになりました、戦場勝生です。これから
よろしく願います」

俺がそういつて挨拶と共にお辞儀をすると女性は居住まいを正し

て挨拶を返してくれた。

「はい、私は山田真耶といいます。戦場くんが転入することになる1 - 1の副担任をしています。これからよろしくお願いしますね」

そして一呼吸置いて

「ようこそIS学園へ」

山田先生はそう挨拶を済ませると俺を促して校舎のほうへ歩き出した。

道すがら話をする俺の荷物はすでに寮のほうに運ばれているので、残りの荷物と言えば今俺がもっている今日の授業で使うであろう教材などが入っている鞆だけだ。

寮は相部屋のようであり、しよに暮らすことになるのはあの彼女のようだ。

俺は一応その話を聞いたときに少しだけ驚いた表情をした。山田先生は俺の驚きが少ないように感じたみたいだが、俺もISを動かせる男なんですからそういうこともあると思っていたと答えると納得したようだ。

他にも男でISを動かせる一人目の織斑一夏の話や、クラス代表を決める決闘の話に今年はクラス対抗戦が中止になったことなどを話しながらしばらく歩くと職員室に着いた。そこで俺はクラスの担任である織斑千冬と同じ男でISを動かせるシャルル・デュノアに眼帯をした女の子ラウラ・ボーデヴィツヒと合流し簡単な挨拶を済ませると、5人で1 - 1の教室へと向かった。

それにしてもラウラってシャルルの次の日に転校して来るんじゃないかったっけ？ あれ？

1 - 1の前について順番に中に呼ばれると言うことで俺は最後だった。シャルルが入っていった後教室がやたらうるさくなったり、その間ものすごく剣呑な雰囲気を出すラウラと二人つきりになつて気まずかったり、ラウラが入っていった後もなにやら教室が騒がしくなったり正直いつになったら俺の番になるんだ？ とか思わないでも無かったりしたんだが、ようやく俺の名前が呼ばれた。

俺は教室に入り視線を教卓に固定したままその横に到着。そしてキュツと音がなりそうな勢いで正面を向き視線を左から右へ一瞥した後、教室の後ろを見ながら

「戦場勝生です。これから1年間よろしくお願いします」

以上です。 といって無難な挨拶を済ませた。

その次の瞬間――

「嘘！ 三人目！？」

「おお！ こんどはワイルド系！織斑君のカッコイイ系とは別にこれモイイ！」

「戦×織 いや 織+戦×デユ もフッフ、じゅるり」

とまあおおむね好意的に受け入れられて、正直ほつとした。それに何人かは俺のこともイケメンのボーダーを越えているとして扱ってくれそうなのは特に助かる。見た目がすべてとまでは言わないが見掛けによつて好意的に受け止めてもらえるのは人間関係を築く上でプラスに働くからな。

さてさて、無事に挨拶も済ませることもできた。これからよろしく願いますよ、IS学園。

後書き

懲りもせずにまた書き始めてしまった……

このような作品でもいいという方は、どうぞお付き合いください。
きっちり批評してくださる方は特にお願いいたします。

第2話

「ゴホン！ ではHRを終わる。各人はすぐに着替えて第2グラウンドに集合。今日は2組と合同で模擬戦闘及びIS基礎実習を行う。解散！」

っと、確かアリーナの更衣室って遠いんだっけ？ 急がないとな。シャルルが一夏に話しかけようとしているけどそんな暇は無い。

「デュノア俺達男子はさつさと移動しないと時間がないぞ。織斑スマンが更衣室まで案内してくれ。アリーナの更衣室を使うとは聞いているんだがいかんせん場所が分からん」

俺はそう言うときシャルルの頭に手を置いてグリツと扉のほうに向かせながら教室から出ようとする。シャルルが俺の不意打ちに対して、ぐへっとか本来なら言っちゃいけないような言葉でリアクションを取った様な気がするが、気がするだけで気のせいだろう。うん。

「ああ、わかったこつちだ」

一夏はそれには気付かなかったようだが、急がないといけないことを十分に理解しているため、直ぐに先行して移動を始めてくれた。

「戦場が言ったように俺達男子は空いているアリーナ更衣室で着替えをすることになる。実習のたびに移動することになるから、面倒だが時間に気をつける。わからないことがあったら俺に聞いてくれ、というか戦場はよく知ってたな」

知ってても不自然じゃないようにクラスまでの道すがら山田先生

に男子の着替え場所の質問をしておいたからな。

「ああ、クラスの前までの移動の間に山田先生に聞いておいたんだよ。というかシャルルもその場にいたはずなんだけどな。ゆっくり織斑と話そうとするなんてあれか？ それにかこつけて女子の着替えでも見ようとしたのか？ もしかしてデュノアって見かけによらずむつつりさん？」

「えええええ！ ち、ちがうよ。ただちょっと忘れてただけだよ！」
「まあそういうことにしておいてやるよ。そういえば俺が教室に入ったとき微妙に空気が重かったんだが何か合ったのか？」

「ん、ああもう一人の転校生ラウラって奴がいたろ？ そいつにいきなり叩かれてな。まだちょっと痛いぜ」

「何で又そんなことに？ 織斑は彼女に何かしたのか？」

「いや何もしてないし、そもそも彼女とは初対面だ。でもたぶん千冬姉がらみだろうな。千冬姉ドイツにいたことあったし。」

「ふーん、よくわからんな。っとそっぴいえば織斑は織斑先生の弟なんだったな……ってうわあ」

走りながら会話をしていると前から女子生徒がわらわらと集まってきた。

「ヤバイもうだいたい集まってきた。戦場、デュノアとにかく走り抜けるぞ」

「え？ な、なんで皆こんなに騒いでるの？」

「男でISが動かせるのは俺達3人だけだから。珍しいだろうし、なによりここは同年代の男っ気が全く無かったんだ今の俺達の状態は蟻に群がられてる砂糖みたいなもんだろ」

「あ、蟻……砂糖……」

「流石に今の表現はどうかと思うぞ戦場。俺ならウーパールーパーみたいだって言うけどな」

「んな昔の日本のネタはデュノアにはわかんねーだろ」

とまあそんなことを話しながら更衣室にたどり着いた俺達は息を整えながら改めて自己紹介することになった。

「俺は織斑一夏。一夏って呼んでくれ。数少ない男同士これからよろしくな」

「俺は戦場勝生。俺のことは勝^{カッ}とか勝生と呼んでくれ」

「あらためて、僕はシャルル・デュノアっています。僕のことシャルルでいいよ」

「よし、とりあえずこれくらいにして急いで着替えよう。遅刻するとマズイ。家の姉はそれはもう恐ろしいんだ」

一夏がそういったのを皮切りに俺も一夏も服を脱ぎだす。なにやらシャルルが可愛らしい悲鳴を上げているが軽くスルー。というか援護の意味もこめて着替えながら一夏に話を振る。

「そういえば一夏も専用機持ちなんだって？ それに、いきなりイギリスの代表候補生とやりあったんだって？ 山田先生から聞いたぜ」

「ああ、白式っていうんだ。あとセシリアと戦ったのはつい売り言葉に買い言葉で……」

「ははっ、そうらしいな。でもその戦い結構いい勝負だったって山田先生も言ってたし胸張っていいと思うぜ？」

そんな話をしながらも俺達が着替え終わったときにはシャルルも着替えを終えて俺達を待っている状態だった。一夏は俺やシャルルの着ているISスーツを見て少し気になったようだが、俺が時間がまずいという慌てて3人で移動を始めた。

グラウンドではすでに他の生徒達がそろっておりそこには当然織

斑先生もいるわけで……。

「遅い！」

「いや、千……」

「すみません織斑先生、一応5分前には行く予定だったのですが、少々勝手が分からず織斑君に迷惑をかけてしまいました」

「……まあいい、さつさと並べ」

俺たちが到着したのはぎりぎり5分前といったところだったのだが、他の生徒がいる手前というか全体の気持ちを引き締めるためなんだろぅがいきなりの叱責を受けることになった。

それに対し、一夏がすぐに何かを言いかけたようだが俺がそれをさえぎってその場を納める。

しかし、今一夏は千冬姉と言おうとしたんだろうが。俺がそれをさえぎったとき織斑先生が若干残念そうな恨めしそうな顔で俺のほうを向いたので、もしかしてもしかしたらもしかすると。織斑先生は原作でよくあった「千冬姉」「織斑先生と呼べ」と言って出席簿で一夏の頭を叩く一連の流れを実は楽しく思っていたのかもしれない。だとするとずいぶんと激しいが、どんだけブラコンなんだよ！
って感じだよな。

ってあ、一夏とセシリアに鈴が織斑先生に叩かれてーら。一夏めせつかくさつきはフォローしてやったのに……。

「では、本日から格闘および射撃を含む実戦訓練を開始する」

『はい！』

織斑先生が担当しているというのもあるのだろうが、今日から本格的にISを使った訓練が始まるからだろうな、皆が皆気合の入った返事をした。

「まずは、戦闘を実演してもらおう。幸い元気が有り余っているのがあるからな。オルコット、鳳！ 前へでろ、専用機持ちならすぐに始められるだろう」

「めんどいなあ、なんで私が」

「こついうのは見世物のようで気に入らせんわね」

どうにも不満気な様子でいる二人に織斑先生がなにやら小さく話しかけたと思ったら急にやる気になった二人。正直急に態度が180°変わった二人に他の生徒は若干呆れ気味だったり。

「それで、お相手はどなたですか？」

「別に私はあんたでも構わないわよ？」

「慌てるな、馬鹿者。お前らの相手は——」

その時、空から空気を切り裂く音と共にISが墜ちて来た。

いやそれはラファール・リヴァイヴを纏った山田先生なのだが、あれは一夏へ直撃コースだな。ふむ、無駄に怪我なんぞしたらいいからな助けるとしよう。

さてこれで俺のISがお披露目となるわけだが、まさかこんなタイミングでは……んん！ まあいいある意味インパクトも有るし及第点だろう。

さあいくぞ——

【黒衣】

後書き

次回やつとオリ主のISが出てきます。

ただすべての武装・機能を説明するつもりはありません。

「Need to Know」というわけでもありませんが、説明文ばかりだというのは小説を書く上でNGだそうなので、必要な設定を必要なときに取り出していく形で行きたいと思います。

第3話

その姿は奇抜。異端でも異常でも独特とも言えるかも知れないが一番しつくり来る言葉は奇抜だろう。

ぱつと見は打鉄に似ているといえなくも無い。だが打鉄と、否、一般的なISと違いスマートになっている。そう、スマートすぎる。肩の装甲も小さくなっており肩に直接固定されている。そのため人のシルエットとしてはがっしりとしたイメージを受けるがISとしてはやはり細身に見える。

また腕にも特徴があり、手首から肘にかけて外側に向けて太くなるようになっておりその部分は実態刃^{ブレード}となっている。だが手首周りも他のISと比べると十分に太くなっている。よく見ると、太くなつた肘の付け根に丸い形が見えそこは両サイドからシャッターのように閉じられているのが見える。

この姿を見ただけでは正直このISが何をコンセプトに作られたのかを判断するのは難しいだろう。だがそれも当然のことだ。何故なら……今の姿はこのIS本来の姿ではないのだから。

勝生はすばやく一夏の傍に来ると、真耶に向けて手を広げこうつぶやいた。

「A I C『停止結界』発動」

次の瞬間には真耶は勝生の掲げた手の前で停止していた。一夏と真耶がほつとしたところで勝生は停止結界を解除した。一夏の真上で停止していた真耶は当然のごとく重力にしたがって落ちた。真下にいる一夏に向かつて。

「え?! きゃあ!」

「ええ! ちょ、ま……」

そしてISを展開していない一夏は真耶を受け止められることも無く、そのまま真耶ごと倒れ。その時お互いに衝突を回避しようと体を動かしたのだろう。どういうわけか原作のように真耶を押し倒したような格好で、胸に顔を押し付けていた。いや胸を揉む手が右手だけでなく左手も追加され、セルフぱふぱふ状態になっている上に真耶の股下、両足の間に体があり膝をついた体制になっているのであかも正●位で相手の胸を堪能しているようにしか見えないあたりアニメのときよりも凄い事になっている。

（山田先生から妄想の独り言だけじゃなく、なんか喘ぎ声っぽいものまで聞こえてくるし……いや、気のせいだ。うん、気のせいだ。）

とその時、勝生はすばやく横にずれ今までの場所を通り過ぎる青い色をした何かを避けた。避けたものが来た方向を見やると体を感じっきりのけぞらせた一夏と、すごくいい笑顔をしたセシリアがISを展開して立っており。

「あら、二人まとめて打ち抜くはずでしたのに。ホホホホ……」

と、黒い笑い声を上げ。

次には鈴音が、甲龍に二基装備されている大型青龍刀「双天牙月」そつてんがげつを連結させ投擲した。

勝生と一夏は各々それを避けたが投擲された双天牙月はブーメランのように戻ってきた。勝生はあらかじめその軌道からも外れるように避けていたが、一夏は避ける際にそんなことを考えてもいなかったように大きく体制を崩していた。

だが、双天牙月が一夏に当たることはなかった。なんと真耶が二回発砲し二発とも正確に双天牙月に当たり、その軌道をずらしたのだ。それも倒れた状態から上体を起こしただけの姿勢で。

これには周りの学生達も驚いた様子で真耶を見ていたが、千冬はさも当然とばかりに話した。

「山田先生はああ見えて元代表候補生だからな。今くらいの射撃は造作もない」

「むっ昔のことですよ。それに代表候補生止まりでしたし……」

その事実には生徒達は皆驚いているようだったが、そんなことはお構い無しに千冬はセシリアと鈴音に試合の開始を告げる。

「さて、小娘どもいつまで惚けている。さっさと始めるぞ」

「え？ あの、二対一で？」

「いや、さすがにそれは……」

「安心しろ。今のお前たちならすぐ負ける」

二人は二対一という試合に流石にそれはどうなのかといった様子で反論しかけたが、千冬にはばつさりと切り捨てられると安い挑発にムツとしたのか、やる気十分と言った様子で試合が始まった。

試合が始まると千冬はシャルルに真耶が使っているISについて簡単な解説をさせた。

三人は射撃戦を繰り返していたが、簡単な解説が終わるころには真耶に回避パターンを見切られており。真耶の射撃によりセシリアが誘導され鈴音と衝突。その隙を武器をすばやく切り替えた真耶によってグレネードを打ち込まれ、二人仲良くグラウンドに墜落することとなった。

二人は互いの失敗点を実に正論で言い合っており、責任の押し付け合いをしていた。

（二人はあれだな、TPOをわきまえたほうがいいな）

「さて、これで諸君にもIS学園教員の实力は理解できただろう。以後は敬意を持って接するように」

千冬はそういつて手を叩き、生徒達の気持ちを切り替えさせる。

「専用機持ちは織斑、オルコット、デュノア、ボーデヴィツヒ、戦場、凰だな。それでは専用機持ちがリーダーとなってグループを作れ、いいな？ では分かれる」

千冬がそついい終わるや否や二クラス分の女子が三人の男子生徒のところへ群がってくる。勝生は平気な顔をしているが内心どうしたものかと悩み、一夏とシャルルに至つては表情からして困惑している。

その状態を見た千冬はつい先ほどの発言をした自分の浅慮さに嫌気がさしたのか、低い声で生徒達に主席番号順に各グループに入るように指示を出す。もたついた場合のペナルティーを告げることも忘れずに。

因みにクラスは基本一クラス30人だ。これが二クラスなので60人そしてここに一組の転校生3人に二組の転校生一人を加え全部で64人。これを専用機持ちの人数である6グループに分けることになるので、前4グループは11人、後ろ2グループは10人の班分けとなった。

後書き

今回はとても中途半端なところで止めました。

この作品を書く上で一人称だけでやるべきか三人称だけでやるべきか、またはハイブリットか。悩んだのですが、原作を読み返してみると基本一夏の一人称なんですよね。で、ところどころ視点が変わったたり、三人称になったりと。

ですのでこの作品も基本オリ主の一人称のハイブリ型で行こうと思います。

今回中途半端な終わりは、そのあたりの切り替えが上手くできそうに無かったからが原因だったり。

あと、携帯で見ている人にとって後書きを後書き欄に入力すると表示が面倒になると思って本文中にこういった形で書かせていただいているのですが。このままでいいものなのでしょうか？ それとも直したほうがいいのか？ どっちなんだろ？

第4話

さて、無事に班分けも終わったことだし俺も担当の子達のサポートと行きますかね。

「ねえねえ、戦場くん戦場くん。戦場くんも専用機持ちだったんだね」

「山ぴーが落ちてくるのを止めたのって、あれってAIC？」

「ん？ ああ、そうだよ。第三世代型で名前は黒衣って言うんだがな。んで、山田先生を止めたのはAICであってるよ。といっても黒衣に組み込まれているAICは省エネルギー化と安定性を求めたから、範囲・射程共に一般的な第三世代型より遙かに下。というか、範囲はIS一体分がギリギリある程度だし。射程に至っては、手で触れられるほどに近い距離になっちゃってるしな。攻撃用じゃなく殆ど防御用なんだよ。」

因みに、殆ど防御用ってのは嘘だ。黒衣に積んであるAICの本来の使用目的は拘束だ。攻撃の基点とするわけでも、防御結界として使うわけでもなく、純粹に拘束。本来はそれだけの為のAIC。でもこんなこと馬鹿正直に言って黒衣のコンセプトを聞かれても困るしな。何せとてもじゃないがそれを聞いていい顔をする人は、まともな世界の住人にはいないだろうからな。

とまあ、最初こそISの話だったはずなのにいつの間にか俺に対する質問コーナーとなっていて、好みの女の子のタイプなんかを聞かれたりした。好みのタイプに関しては、好みと言うか勘違い女は嫌いだ、ということだけを言っておいた。最近もう本当に外では勘違い女が多いからな……

「さて、お喋りはこのあたりにしておいてそろそろ訓練を始めよう

か。うちの班が使うのは打鉄だ。^{うちがね}こいつは日本が純国産モデルとして作った第二世代型のISで安定性の高い防衛型ISだ。^{プリセット}基本装備には刀型近接ブレードがあるなど、見た目通り武者^{むしゃ}つて感じたが、二世代型らしく後付武装によって近接戦だけでなく射撃戦もできる実に堅実^{つやま}って言葉がよく合う機体だ。総合的な性能としては流石に二世代型最後発のラファール・リヴァイヴには負けるかもしれないが、ISの基本中の基本である？きちんと動かせること？要するに機動の訓練に、回避・防御等の基礎動作を練習するにはちょうどいい機体ってことだ。ここまでで何か質問とかあるか？」

随分と長つたらしい説明をした上に今日の実習内容である、装着・起動・歩行そして停止については何も話していないと言う今の説明に質問も何もあるわけも無く、まあしかし今の説明は今の説明でそこそこためになったようで特に不満の声も出なかった。

「んじゃ、とりあえず俺が一度実演して見せるからな。よく見ておいてくれ。」

そう言つて俺は打鉄を装着し起動から歩行までをして見せ……た所で一夏たちのグループが何やら騒いでいるのに気が付いた。うちの班の女の子達も俺がそっちに顔を向けたのでつられてその騒ぎを目にすることになった。そう、そしてその光景を目にした……見てしまったんだ。

一夏がお姫様抱っこで女子生徒をISのコックピットに運ぶところを……

「さて、最後にISをしゃがませた状態で装着解除をします。そうしないとコックピットが高い位置で固定されてしまいますので十分に気をつけるよう……に……」

一夏のお姫様抱っこプレイを華麗にスルーしつつ、なぜか丁寧な口調になってしまいなながらも説明を続け、ISをしゃがませようと……止めた。できなかったじゃなく、止めた。

すっごい期待された目で女の子達に見られたら答えなきゃでしょ？ まああくまで自分がおいしい思いをできる範囲でだけど。

この学園可愛い子ばっかでよかった。

「おーけーおーけー、君達の気持ちはよくわかった……やってやんよ！」

俺がこう言うといっしょに喜ばれた。正直転校初日の男子相手に無防備すぎるような気もしないでもないんだが。この学園に来ている女の子達の殆どはIS学園に来る事前準備としてISの勉強をするために女子高に通ってきた訳で、年頃の男子との接触が極端に少ない。その上俺たちはISを動かすことのできる男子、つまりこの女尊男卑の世界において対等になれる男と言うわけで……この女の子達の半ば暴走状態も理解できないでもない。

IS学園の外ではこれを世間知らず、もとい箱入りとも言つかもしれないが……

因みに抱っこする際に俺の首に腕を回すようにとか、しっかりとかまっているとか外でやろうものなら白い目で見られるような気障な台詞を顔を寄せて耳元でささやくなんてさらに気障ったらしいことをしたらむしろ喜ばれたことをここに記しておく。

随分と騒いだんだが、織斑先生は一夏の方を重点的にかまっているし、こっちは騒いだとしても実習自体はスムーズにこなしていたので出席簿による攻撃は来なかった。

最後にISを格納庫に戻し織斑先生の挨拶で締めて午前の授業は終了。

一夏が着替えに行こうと呼びに来てくれたがシャルルが機体の微調整があるからと断り、一夏がそのシャルルの気迫に押されて先に

行くことを了承したところで、俺もそれに便乗し機体にちよつと野暮用があるとだけ言つて先に行つてもらった。

俺が残ると言つとシャルルはあからさまに動揺していたが全力でスルー。

「機体の調整とかやつぱ計器とか要るだろ？　とりあえず格納庫に行こうぜ」

と、話しかければ。

「えっ！？　う、うん！？……」

と、あからさまに上ずつた声で返事を返してくれた。

……ヤバイ、なにこの子すっげーてんぱってる。そわそわしてるのが丸分かりで非常に萌えるんですが。

ま、まあ俺は別にDSではないし？　格納庫に用があるのも本当だし。別に行き当たりばつたりで行動して、シャルルに萌えようとか考えてるわけじゃないんだよ？　……本当だよ？

後書き

オリ主「俺、DSじゃないっす。後、AB型っす」

第5話

さーてやってまいりました、格納庫。この状況をどうしたものかと打開策を必死に考えているシャルルに萌え続ける訳にも行かないし、まずは俺の用事から済ませますかね。

「うつし、さつさと終わらせて教室に戻らないとな。シャルルも急げよ？ 次の授業に遅刻でもしたら面倒だ。」

「う、うん……」

んじゃ、まずはさっきの授業で使った打鉄はつと……あつたあつた。さて、さっきは演習後さつさと格納庫に戻してグラウンドにＵターンだったからできなかったんだが。打鉄の状態データをコピーしてつと……よしこれで午後の整備実習のときにスムーズにやれるぜい。

シャルルのほうは……なんかそわそわが加速してる……

「よし、これで終わりつと。シャルルのほうももう終わったのか？ わりいな待つてくれたのか？」

「え？ う、うん。そ、そんなに待つてないから気にしないで」

「じゃあ行くか、いくらＩＳスーツの上から制服着るだけだって言ってももつだいぶ時間がたつてゐるしな」

俺がそう言つて先行すると後ろからシャルルも慌てた様子でついてきた。

更衣室に着いて俺たちはＩＳスーツの上から直接制服を着たんだが……Oh……パンツどうしよう……よし、綺麗にたたんでポケットの中に入れておこ……ん？ 俺がこれに悩んでいると言つことは、シャルルも？ そういえばＩＳスーツ着てる女の子達ってみ

んなノーパン……あんな体にフィットするスーツなのに……サポーター内蔵なんだろうな……うん。は！？ いかん思考があらぬ方向へ行きそうだった……

「……どういうことだ」

現在一夏に誘われて屋上で昼食を取ろうとしています。この場には俺、シャルル、一夏、箒、セシリア、鈴のみでなぜか貸しきり状態となっている。原作でもそうだったようだが……なんでだったわけ？

それにしても昼休み前は大変だった。新たな男性ＩＳ操縦者の俺とシャルルを見ようと全校から生徒達が集まる集まる。シャルルは実に砂糖を吐きたくなるような台詞で回避していたが……一夏はあれを儚げな印象が……等と評していたが、あれは砂糖だ。

俺はあんな器用な真似は出ないので授業が終わるたびに廊下側、つまり右の耳にだけイヤホンをつけて黒衣にコピーしておいた打鉄のデータを見ながら午後の整備実習の前準備。ときおりクラスの子から視線を感じるので音楽プレーヤーの画面を見せ電源が入っていないのを見せておく。そのときにチラッと廊下に視線を動かしてから苦笑し、騒ぎを回避するカモフラージュだということをアピール。そうしないといくら好意的に見られているといっても嫌な奴とか思われかねないからな。……シャルルの対応の仕方があれだし、より一層。

それにしても一夏たちの会話を聞いていると一夏が不憫すぎる……そして一夏が俺たちに仲良く協力していこうといったのに対しシャルルと俺が感謝の意を表したのだが一夏が微妙な顔をしていた。失敬な。

「ありがとう。一夏って優しいね」

「ありがとう。一夏って優しいね」

と、シャルルの後に同じことを実にいい笑顔と声色で言っただけなのに……失敬な。

「ああ、そういえば寮の部屋割りってどうなるんだ？ 男子が三人だろ？ 俺の部屋今は俺しかないんだけど」

「あれ？ 山田先生から聞いてないのか？ 俺とシャルルが同じ部屋を使うことになってるんだが」

「てことは俺は一人部屋のままか……」

「まあ俺とシャルルは同じ日に転校してきたから都合が付けやすかったんだろうし、メンタルのことも考えてだろう。転校生同士でケアし合うことは同族意識もあいまって連帯感を生み出し孤独感を減らせるし、シャルルの場合は母国語がしゃべれる相手と一緒にの部屋でより安心感が生まれるからな。母国語でしゃべれないってのは結構なストレスになるようだし」

「へえ、いろいろ考えてあるのかな？ ん、ちょっと待ってくれ母国語がしゃべれる相手と一緒にの部屋？」

「カツってフランス語話せるの？」

「まあな、とりあえずシャルル同じ部屋同士これからよろしくな」
「うん、よろしくねカツ」

そしてここで会話の内容は食事に戻り、ISスーツのことから一夏の健全な男子としての話、男同士の不毛な話にまで及んだわけなのだが……一夏ってば大変だねえ、ホントイロイロト。

「んじゃまあ、改めましてよろしくな。シャルル、一夏」

「うん、よろしくカツ、一夏」

「二人ともよろしく」

夕飯を寮の食堂で食べた後、俺たち三人は俺とシャルルの部屋に集まった。一夏は一人部屋のままだしい。

それにしても転校初日でいろいろと物が足りないから何にもできん……荷解きに関しては荷物自体がそう多くは無いから服なんかをクローゼットに入れるだけだしな。で、この状況を見た一夏が「飲み物でも持ってくるから、その間に荷解きなんかを終わらせておくといい」

と言つて部屋を出て行つた。俺とシャルルはそれを受けてちやっちやと荷解きを終わらせることにした。

シャルルにどっちのベッドを使うかを聞くとどちらでもいいと言つてきたのだが……シャルルさんや、お主は奥のベッドを主張すべきじゃよ。もし俺が奥のベッドを使うことになったら移動のたびに手前つまりこの部屋のドア側のベッドの前を通過することになる。大した事ないようにも思えるがシャルルの場合慎重をきすにこしたことは無いのだから奥のベッドを主張すべきだろう。……俺は自分から手前のベッドを使うことを主張した。

荷解きがちょうど終わったタイミングの良いところに、自販機でジュースを買つてきてくれた一夏が帰ってきた。ジュース代を払おうとしたのだが、ようこそ転校生来てくれてありがとう記念つてことでおごりだそうだ。目がマジだった。

一夏のおごりのジュースを飲みながら部屋で飲むお茶なんかも買つてこなきゃなーとか、他に必要なものあつたっけーとか話をしていくと抹茶の話なんかから学園の外の町の案内を一夏がしてくれると言つ話になり、シャルルはもちろんのこと、俺もこのあたりのことは全く知らないのと一緒によろしく頼むと言つておいた。……シ

ヤルルの笑顔にヤラレター夏の援護に

「そついえば一夏たちはいつも放課後にISの特訓してるんだって？」

「ん？ ああ、俺は他の皆より遅れているから、地道に訓練時間を重ねるしかないからな」

「そつなんだ。ねえ一夏、その訓練に僕も加わっていいかな？ 専用機があるから少しは役に立てると思うんだ」

「おもしろそうだな。よし一夏俺もつきあうぜ」

「サンキューな二人とも、凄い助かる」

「よし、話も区切りがいいしそろそろシャワーでも浴びて寝るとするか」

「お、そうか。じゃあ俺は部屋に戻る、また明日な」

「うん、またね一夏」

「また明日だ一夏」

そつ言い合って一夏は部屋に戻っていった。

シャルルにシャワーをどっちが先に入るか聞くと、原作のように後で使うとのことをお言葉をいただいた。俺は一夏と違ってシャワーでも糞長い時間まさしくあびるようにシャワーを浴びる派なので一瞬どうしようかとも思ったのだが、シャルルの都合を優先させることにした。

シャワーは放課後のアリーナの更衣室が一箇所男子用になっているようだから——これは一夏が毎日のように放課後訓練するので——そのシャワーでたっぷり浴びるとしよう。正直、原作ではアリーナの更衣室にシャワーは無かった気がしないでもないのだが、あるにこしたことは無いのだしあってよかったと思うことにした。

お互いシャワーを浴びてさっぱりしたところでおやすみと言葉を交わし眠りに着いた。

今はまだコルセットをしているから胸元は膨らんでいないのだが
……十分に上気した頬とかやばいです。と、あほなことを考えなが
ら俺は眠りに落ちていった。

第6話

日はめぐって今は土曜日の午後。開放されたアリーナで俺、シャルル、一夏、箒、セシリア、鈴とそろい踏みで訓練をしようと集まっています。まあおもに一夏の訓練なのですがね。

さて、まずは一夏とシャルルが模擬戦を開始したのだが……うわあ一夏、シャルルのいい様に遊ばれてるな。

シャルルのラファール・リヴァイヴ・カスタム？は基本的に実弾武装しかない。後付武装でB T兵器を搭載することはできるけどB T兵器自体がイギリスですらまだまだ試験運用の域を出ていない以上、？デユノアのIS？に搭載されているとは思えないしな。

ん？ もうそろそろ終わるか、早いな。結局一夏は距離を詰める事ができないままだったか……

「おつかれさん、一夏いいとこなしたな」

「うえ、そうはつきり言うなよ。それでも結構傷つくんだぞ」

「すまんすまん。侘びと言ってはなんだが次は俺の戦いを披露しよう……オルコットさんか凰さんどっちか相手してくれないか？勝ち負けは度外視するから二人纏めてでもいいけど。ああいや待てよ、一夏に見せるんなら射撃戦主体のオルコットさんのほうがいいか。オルコットさん悪いんだが相手頼めるかな？」

「いいですよ、一夏さんの前でわたくしの強さを貴方にも教えて差し上げますわ」

さて、対戦を受けてもらえたのはいいがどう攻めるとしますかね。一夏に俺の対射撃型との戦い方を見せるといっても、黒衣の通常飛行速度はぶっちゃけそこまで早くない。どの程度の速度かということセシリアのブルー・ティアーズよりも若干遅いぐらいだ。

そんな、俺の黒衣でセシリアのブルー・ティアーズと戦って勝つ

には近接武器オンリーではまず不可能だろう。セシリアは単純に距離を詰められないよう、後ろに下がりながら射撃すればいいだけだからな。

しかし、ここはアリーナで戦闘区域が限られている。そこを上手く使いセシリアを壁に追い込むような戦闘機動を取れば距離を詰め、近接戦に持ち込むことも可能だろう。

だが、それでは勝率がかなり下がるし。そんなことをしてしまつたら無駄に目立ってしまうだろう。

俺は一对一ならやっぱり勝ちたいし、だからと言ってめちゃくちや強いのをアピールしたい訳でもない。後々のことを考えると、なかなか強いが飛びぬけているわけではない、という評価がベストだろう。もちろん専用機持ちということを考慮に入れた評価としてだ。ならばこの模擬戦は近接・射撃を組み合わせそこに+αで派手さはそこそこで勝つのが目標となる。ああいや+αは自重したほうがいいのか？ しかしあれは後々いきなり使えるようになりましたじや言い訳としては苦しいし、やはりこのタイミングで披露したほうがいいな。

「さて、オルコットさん。模擬戦とはいえ俺は勝ちにいくからな。代表候補生であっても油断してたらあつという間だぜ」

「いい啖呵ですわね。ですが勝利を飾るのはこのわたくし、セシリア・オルコットとブルー・ティアーズですわ」

俺とセシリアは軽い舌戦を交わしながらアリーナの中央上空へたどり着く。

セシリアはすでにスターライトmk?をコールし終わっているが俺はいまだに無手である。

「さあ、踊りなさい。わたくし、セシリア・オルコットとブルー・ティアーズの奏でる円舞曲で！」

セシリアのその言葉を狼煙として直後にスターライトmk?の光が俺を襲う。

大きく体を仰け反る事によってそれを回避した俺は、動きを止めず宙返りのような体制をそのままに斜め後ろ下へと移動、体性を整えながら彼我の位置関係を確認。

すぐさま撃たれる次撃は距離が離れたぶん初撃と違い多少の余裕を持って左に回避。

そのまま緩い大きな弧を描き相手の出方を伺いながら彼我の距離を埋めようとする。

三発、四発、五発と続けざまに撃ち出される光を避けながら銃口の向き、視線、軌跡、速度のデータを確実に取っていく。

（つたく原作だとこの時期は殆どいいとこなしのちよろいさんとしが描かれてないってのに、なんだよこの射撃能力！ 移動せずの固定射撃だが精度が半端じゃねえ！！ 黒衣の速度じゃ楽に距離を詰めれそうにねえな。ま、あくまで回避だけでは、だけどな！）

立て続けに撃ち出される攻撃を避け続け、しかし反撃をするわけでもない勝生に痺れを切らしたのかセシリアはビットを射出しようとする。

（初撃時の反応速度その後の攻撃の回避状況から考えますに、移動速度はそれほど速くありませんがそれを反応速度で補っているようですわね。でしたら反応できても避けられない攻撃をするだけですわ！）

セシリアの癖というよりブルー・ティアーズのビット制御の難しさの弊害なのだろう。彼女はビットを射出する際にその制御に集中するため、ハイパーセンサーと自身の目の両方でビットの制御命令

を決定する。そう、そのためスターライトmk?のリアサイトから視線をずらした。

（この瞬間を待っていた！！）

俺は左手を前に半身になりながら、右手を後ろに量子変換されている銃？魔晄？を体で隠しながらコール。セシリアがビットの射出とするのと同時に構え、照準をハイパーセンサーとのリンクに任せながら引き金を引く、という相手が止まっているからこそできる早撃ちをやってみせた。

引き金を引かれた魔晄から放たれたのは一筋の淡い緑色の光だった。

魔晄から放たれたビームはビット制御のため動きが取れなくなっていたセシリアに一直線に向かう。

観戦者の多くが当たると思ったその光はしかし、ギリギリのところで避けられた。

（あれを避けるか！　だがここからは俺のターンだ！）

それを見届けきる前に勝生はすでにセシリアへ一直線に向かう軌道へと変更しており、続けざまに魔晄の引き金を引いた。だがそこから飛び出したのは光の筋ではなく炸薬音を響かせる実弾だった。

ダダダッ！　ダダダッ！　ダダダッ！

繰り返されるのは指切り三発ずつ打ち出される実弾の音、音、音。初撃を回避した際に体勢のくずれたセシリアに反撃の余地を与えないように繰り返される攻撃。セシリアは左右上下に回避しながら体勢を整えることになり、その間にも勝生は一直線に距離を詰め続ける。

セシリアが反撃できる程に体勢を整えた頃には、勝生が反撃を開始した地点からすでに半分以上距離を詰められていた。が、セシリアは焦ることなくスターライトmk？を構え、正確に撃発した。

俺はその光の軌跡を抱きこむように回避しながら収納する暇もないといったように魔晄を手放し、イグニッション・ブースト瞬時加速を行う。一息に多くの距離を詰めると共に近接戦闘用長刀？正宗？を左手に展開。オープン

まるで原作の一夏vsセシリアのようなこの場面。セシリアはそのときのことを思い出したのか、不敵に笑い

「くらいなさい！」

腰部装甲に装着された両サイドのブルー・ティアーズからミサイルを発射した。

……今度は俺が笑う番だった。

ダン！ ダン！ ダン！

アリーナにいた全員が目を見開いた。それも仕方がないだろう、ミサイルに迎撃されるはずだった勝生がミサイルを回避したどころが一瞬のうちにセシリアの背後を取って今にも左手に持った近接刀で攻撃を加えようとしているのだから。

一閃。

セシリアの背後を背中合わせの形で取った勝生は左回りに独樂のごとく振り向き、セシリアの背後へ強く踏み込みその勢いのまま正宗を右から左へと振り切った。

その一撃はバリアーごと後方推進翼とビットを収納する二基の非固定浮遊部位を切り裂き、セシリア自身へもダメージを与えた。ノンロック・ユニット

勝生は振り切った左腕に持っている正宗をそのまま手放し、攻撃を受けたことで前方に押し出されたセシリアに追いすがるようにさ

らに一步踏み込む。そして両手を頭上へと持っていく、もう一本の正宗を展開。上段の構えから勢いよく振り下ろした。

追撃のその一手は装甲の薄いセシリアの右鎖骨を強かに打ちつけ、その勢いのまま彼女をグラウンドに叩きつける結果となった。

すぐさま追撃をしようとした勝生だったが、そこでシャルルと一夏から制止の声がかかった。

「やっべ、やりすぎたか？」

俺はグラウンドに叩きつけてしまったセシリアの方へ向かいながら、模擬戦だったのだからと開き直るか、それとも流石にやりすぎたと謝るべきか、どうすべきかを考えていた。

後書き

ダン！ ダン！ ダン！ とか、どうやって背後を取ったとかは解説は次回で。もしくはチラシの裏になるかも。

第7話

俺は派手に墜落したセシリアの方へ向かいながらどうすべきか考えていたが、やはりこれは模擬戦とはいえ真剣に取り組んだ結果なのだから彼女の心配はしても謝罪はしないことにした。……彼女の性格上かなり怒ってきそうだが。

「あいたたた、一体何が起こったんですの？」

「セシリア大丈夫か？ どこか怪我とかはしていないか？」

「あら戦場さん、ええ特に怪我などはないようですね。それより一体何が――」

「セシリア！！ 大丈夫か？ 怪我とかしてないか？」

「い、一夏さん！？」

俺がセシリアに怪我の有無を聞いた後、俺に何があったかを聞こうとセシリアが問いかけてきたその途中で、彼女を心配してやってきた一夏が彼女の顔を正面から見据える形で近づいたものだから、セシリアは頬を赤らめて上ずった声を上げるようになった。

その後遅れてきたシャルル達だったが、箒と鈴は一夏とセシリアが随分と近い距離で話しているのが気に障ったのかあからさまに不機嫌そうな顔をしている。箒なんかに至っては、ISに守られているのだから怪我などするはずがないだろう、とまで言っている。

「いや、流石にそれはナイだろ。普通に心配だから怪我の有無の確認ぐらい気遣いとしては当然じゃないか？」

「あはははは……」

一夏たちの口論をすぐさまそこから離脱して回避していた俺はそう小さく零したのだが、口論に加わっていなかったシャルルに聞か

れたらしく、しかしシャルルも何と言っているのか微妙なようでもさしく微妙な笑いを返された。

しばらくして結論として一夏が悪いということに収まったのか、四人とも俺とシャルルのところに来た。

今度は俺に先ほどの模擬戦のことを聞きたいらしい。セシリアは何が起きたのか全く分かっていなかったようで、一夏たちもどうやってあの状況を作り出したのか聞いてきた。

「あれは、黒衣に積まれている第三世代型兵器とワン・オフ・アビリティの併用だ」

俺はそう切り出して最後のシーンの解説を始めた。

黒衣に積まれている第三世代型兵器AIC。これはPICの発展系で慣性停止能力なんてはつきり言って科学力というよりまるっきり超能力にしか思えないふざけた代物だ。

触れた物の表面の慣性を完全に停止させる特殊なエネルギー派を発生させる。これによりエネルギー派にとらわれた物はその動きを完全に止められる。高速で飛んでくる弾丸すらわけなく停止させてしまうのだから、慣性消滅能力とも言えるだろう。だが黒衣に積まれたAICはちょっとばかり気色が違う。

黒衣は本来のAICのようにエネルギー派を発生させて物の動きを止めることが殆どできない。以前実習のときに真耶を受け止めたときは、正直な話AICを全力で稼働させて俺自身の集中力も一杯一杯のところまで振り絞っていた。それだけやってやっこの思いで可能なのだ。

じゃあ何ができるのかと言われると、自身の周りに特殊な力場を作ることだ。これだけだと具体的に何ができるのか分かり難いが、ようするに見えない足場を作る能力だと思えばいい。

これにより俺は空中で浮遊、飛行といったものではなく、まるで地面の上にいるかのごとく立ったり、歩いたりすることができるようだ。これは別に地面に平行にしか作れないわけではないので、地面に水平に立ったり、逆さまに歩いたりもできる。

そしてこれは足場と表現できるだけあって、それを基点に行動することも当然できる。つまるところ空中で足場を蹴って加速することとできるのだ。分かりやすく例えるならプールで壁を蹴って勢いをつけるのと同じといったところだろうか。

「でだ、俺は開始直後から集めたセシリアの射撃データをもとにそれを回避して瞬時加速と同時に足場を蹴って加速。一気に近づいたわけだが、そこをセシリアがミサイルで迎撃。俺はそれを足場を利用して進路を急変更、セシリアの直上へ移動。そこでまた足場を蹴って今度はセシリアの背後を取り攻撃を加えたって訳だ」

「なるほどなあ、あれ？ 勝生最初ワン・オフとの併用って言ったよな。今のにワンオフはどう関わってくるんだ？」

「それがセシリアが何があったのか把握できなかった一番の原因なんだ。黒衣のワン・オフ・アビリティー『黒衣無想』こくいむぞうこの効果のせいなんだがな」

俺はいったんそこで言葉を切り、皆を見回してから話を続けた。

「計測機器に対しての防御。これが黒衣無想の能力だ」

「計測機器に対しての……」

「防御？……」

俺は一夏とシャルルがそう呟いたのを聞いた後、説明を続けた。

「要するに相手からのロックオンなんかから外れるってことだ。これによってミサイルのロックも外れるし、ハイパーセンサーからの追跡も振り切ることができる。だからあの場面でセシリアは俺の姿を完全に見失い何をされたのか分からないままだったんだ。そうでもなければ360°。すべてを見渡せるハイパーセンサーの追跡から一対一の状況で逃れることなんてできないからな」

皆はなるほどといった様子で納得してくれた。

そこまではよかったんだ。うん、よかったんだ……

その後でセシリアにブルー・ティアーズの破損状態についてむちやくちや怒られた。

真剣に取り組んだ結果だからといっても納得してくれないし、いやこれは納得していても感情として壊されたことに対しそのまま怒っているのだろう。要するに本能のままに怒りを露にしている訳だな。

勘弁してくれ……

第8話

俺が模擬戦の解説を終えると、セシリアはブルー・ティアーズの修理のためにグラウンドを後にし、俺は破損させた張本人として付き合うことになった。

更衣室で着替えた後、女子が使っているほうの更衣室前に移動しセシリアと合流。一緒に真耶のところへ行く事となった。

「まったく、本来ならこの後も一夏さんと一緒に訓練をするはずでしたのに——」

「あー、少なくともあの模擬戦は真剣勝負だったんだ。いい加減機嫌を直してくれ頼むから」

と言ってもセシリアからの言葉責めはしばらく止まることなくあった。辟易しながらそれを聞き流していると、最終的に俺の態度から暖簾に腕押しと思ったのだろう、まったく……と言って終わった。ちなみに今回のようにISが破損したりした場合の修理にはクルスの責任者に任せることになっている。ISは機密情報の塊なので修理には各国から担当者が送られてくるのが当然じゃないかと思うかもしれないがそんなことにはならない。ISはたしかに秘匿情報満載では有るがそこにアラスカ条約が待ったをかける。

曰く、ISに使われる技術は開示しなくてはならない。

要するに内容が一般に公開できない機密であつても委員会を通して申請すれば本来は手に入る情報でもある。だがそんな中、新技術を開発して直ぐ開示してしまつては開発側には旨みが全く無い事になつてしまう。が、それを解決するのがIS学園という場所なのだ。あらゆる法の適応外という特殊な立ち位置のこの場所では、新技術の試行に関しての特例があり、そのデータの開示に関して自主性に委ねる、として義務が発生しない。だから各国家、企業はテスト

パイロットに新技術を使った専用機を用意しこの学園に入学させるわけなのだ。

だからそんなIS学園に開発機関の人間が常駐できるはずもなく、今回のような破損、修理に備えてその整備データや機材などが学園にあらかじめ預けられている。それを守秘義務を持ったIS学園の担当者が管理運用しこういったケースに対応しているのである。

そして今その担当者の真耶のところに向かっていいると言っわけである。

まあぶっちゃけ技術の開示に関してはどっこも守っちゃいないがな。全くの無視と言う訳にはいかないから開示する技術と隠匿する情報を使い分けているのが基本だ。さすがにそれで問題が起きたときには委員会を通して徹底的に晒される訳だが。

因みに、俺の黒衣にAICやBTが組み込まれているのは初期の開示情報を元に黒衣を開発したマッド達そのマッドぶりを大いに発揮したせいだったりする。俺が原作知識でチートだぜひゃっほい！　したわけではない。

真耶にブルー・ティアーズを預けた後俺たちはアリーナの方へと戻ることにした。その際にセシリアが黒衣について聞いてきた。

「そっいえば、戦場さんのIS黒衣と言いましたか。第一形態でワン・オフ・アビリティを発現なさっているなんて驚きですわね、一夏さんという男性の場合の特徴なのでしょうか」

「俺のことは勝生でいい。それと勘違いしているようだが……黒衣はすでに第二形態だ。ワンオフはそのときに発現した」

「な！？　第二形態ですって！　そんなありえせんわ、あなた一体それはどういう……」

「……俺が始めてISを動かしたのは一夏がISを動かした日と同じ日なんだ。俺のほうはそれを隠すことができたが一夏は大々的に報道されることになった。男がISを動かしたケースがすでに知られている。それは俺のことを隠す意味を少なからず減らすことにな

った。それなら俺のこともIS学園に送り込んでより多いデータを回収したほうがいい、と言うことになって俺もここに入学することになったのさ」

俺はそこまで言って一息つき、左腕にある黒衣を一瞥した後言葉を続けた。

「だが、そのときはまだ俺のことは世間に知られていない。世間の目は一夏に向いている。ならその隙に秘密裏にデータを大量に取ろうとするのは当然のことだろ？俺はその日からISの訓練漬けになった。毎日毎日訓練訓練だ。で、みごとに第二形態移行して、ワンオフまで発現。研究者達は狂喜乱舞だ、ワンオフはどうあがいても真似されないからな。そこで俺のデータ取りは一応の落ち着きをみせて、やつとIS学園でのデータ取りとなったわけ。ここには一夏と、その他新技術を搭載したISに、一夏に接触しようとする専用機持ちなんかが集まっているからな。それが俺が途中からの入学となった理由。ちなみに俺お前達の一個上の年齢なんだぜ、『入学するなら一年生から』つつーことで一年生をやっているわけだがな」

よくよく考えるとホント黒衣のスペックってイロイロと癖が強いよな、第二形態なのに通常飛行速度があんなに遅いなんて……てか正確には第二形態になって逆に遅くなっているだけだな。やはり最大特徴のステルス能力が強化された弊害なんだろうな。

「ちょっと待ってくださいまし、そんな情報をしゃべってもよろしいのですか！？機密として扱われているのでは？」

「大丈夫、大丈夫。要はデータが集まる前までに横槍が入らなければそれでよかったのさ。だから今このことがばれても問題は無い。後の祭りってやつだ一応委員会への言い訳も有るみたいだしな。ここに来る前に別にばれてもいいって研究者達も言ってたし。」

「はあ、なんだかもう突拍子もないことばかりですわね。聞いてくれるだけで疲れてしまいましたわ」

セシリアは本当に疲れたようにそういつてため息をついた。しかし何か気になったのかハツと顔を上げて聞いてきた。

「勝生さん？ あなた一夏さんと同じ日にISを動かせることが分かったと言いましたけど、それからすでに第二形態移行するなんていくらなんでも早すぎませんか？」

「あの日から学園に入学するまで休み無しで一日15時間以上動かしてたからなあ……」

「な、一日15時間以上ですって！？ いくらなんでも無茶ですわ……」

「あゝ俺はもともと人外な身体能力を持ってたし、ISを動かせることが楽しくて楽しくてしょうがなかったからな、体力的にも精神的にもぶっちゃけ楽勝だった。IS知識に関しては両親が研究者だったからその影響で俺も研究者になりたくてな元々勉強してたし、まあ頭のできは良くないんだが……。軍事訓練に関しては全くと言っていいほど時間使わなかったからな」

セシリアは再度大きなため息をついて呆れている。いや、たしかに無茶苦茶な話だとは思うけど、一応頑張って考えた設定なんだけどなあ……。まあいいか。

俺たちが戻った頃には一夏たちは何試合か模擬戦を終えていて、シャルルが一夏に指導をしているところだった。

第9話

時を少しばかり進めることにする。

俺とセシリアがグラウンドに戻った時にちょうど、シャルルによる一夏へのIS教導が始まっていた。

そして、ラウラと一触即発の状態になり、それも教師の介入と言う形で流れた。

着替えに関しても俺とシャルルが同室で、俺たちは放課後の訓練の後はいつもシャルルはISスーツの上から制服を着て部屋に戻りそこでシャワーをするという風にし、俺は更衣室のシャワーを使っているのも、一夏がシャルルに絡んだりはしなかった。なので三人一緒に更衣室に戻って真耶の風呂についての説明も聞くことにもなった。

そこでふと気付いた。このままだとシャルルの性別バレのイベントが起きないと。いや無理矢理すれば自分で起こせるのだが、正直な話、俺は原作をあまり逸脱したくない。

俺が原作というものがある世界で常に取っているスタンスは一つ。より良い未来を、だ。

それらの世界がリアルであることは十分に理解しているが、それでも原作と殆ど変わらない未来をたどることは確かなのだ。俺というイレギュラーを除いて。

だから俺が行動するのはいつもより良いと思える結果を少し手繰り寄せることだけ。無駄な人死にを無くしたり、経験値にも成りほしくないようなミスをさせないこと。それぐらいしかないことにしている。でないと、未来が何処に向かっていくのか分からなくなりすぎるから。自分のせいで元々よりも悪い結末になるなんて絶対に嫌だから。

そしてこのインフィニティット・ストラトスでは俺が知る限り、俺が介入するような事柄は全く無かった。ならば下手に俺が介入す

るよりはそのままにしておいたほうがいいだろう。一夏たちと一緒に訓練をして彼らをより強くすることはマイナスにならないだろうと思うからこれについては良しと言うことにしている。

だが、すでに俺とシャルルが同室になったことで若干の狂いが出てしまった。これはどうにか修正しなくてはならない。そこで俺はこっそりと今日一夏を部屋に呼ぶことにした。今日の訓練の反省会の様なものをするから、山田先生との用事が終わったら部屋に来てくれと。

そして俺は何時も通りシャルルを先に部屋に帰し、自分は更衣室のシャワーをたつぷりと浴びて部屋に戻るつもりなのだ。一夏にはさらにメールを『俺はシャワー長いほうだから先に一夏が部屋に着くかもしれない。そこで頼みたいんだけど、実はボディーソープが切れてて補充するのを忘れていたんだ。新しいのが収納棚の分かりやすい位置にあると思うからシャルルに渡しておいてくれ。よろしく頼む』と送っておいたし。俺が部屋に戻る頃には計画道理は成就しているだろう。

ただ、帰るのが遅すぎると俺がシャルルが女の子だと知るという展開は迎えることが出来ないためいつもより早くシャワーを終わらせて帰ったほうが良いだろうな。

ベストなのはシャルルと一夏が今後のことを話しているときに部屋に戻るといったところだろう。俺は部屋の住人だからいきなり入ってもおかしくない、だから原作のセシリア乱入のときのように隠される前にシャルルの姿を見ることが出来るだろうしな。

よし、完璧だ！

……そうそう、一夏の訓練に関してなのだが。俺は一夏の教導に

関しては模擬戦以外ノータッチのつもりだ。だって俺は彼にどうやって教導すればいいのか全く判らないから。

その時に一夏のワンオフ『零落白夜』の話から俺の方へも話が及んだので、セシリアにした俺の身の上話を皆にも教えることとなった。

みんなホントいいリアクションしてくれるねえ。ただシャルルと鈴は何処か納得したような表情をしていた。……そういった背景があるのならセシリアとの模擬戦の内容にも納得がいくと。

そう、そこまでしたからこそあれだけのことが出来る様になったのだ。

俺がISを動かせるようになって約二ヶ月と半月。そして俺がIS学園に編入するための申請を出したのが約一ヶ月とちよつと前。それまで男性IS操縦者としての初期データ集め、その後は毎日15時間以上の訓練漬け、そして第二形態移行した後は訓練よりもデータ取りの方がメインになった。

データ取りも十分になって研究者達が満足した頃に入学申請をしたのだが、なにやら色々あっていままで入学が伸びていたのだ。その間の訓練はそれまでと比較擦れば微々たる物だった。……実は皆にした話は若干脚色していることがこれでよく分かるだろう。

まあそれは置いて、これだけのことをやってきた俺のIS稼働時間は実に900時間を越え、もしかしたら1000時間を越えているかもしれない。

だがこれでも俺のIS操縦者としての実力を時間で計算すれば普通なのだ。代表候補生でさえ稼働時間は当たり前のように300時間を軽く越す。代表ともなれば稼働時間で俺を越える人だっているだろう。そう、男ということでデータ取りの為に稼働時間が伸びている俺をだ。

俺は時間をかけたからこそ強くなった。いや、この物良いは正しくない。

俺は時間をかけねば強くなれなかった。

俺は転生者だ。今までに何度も生を受け、死んできた。そして生きていく間に様々な経験をしてきた。転生する世界は選べるし、その中は正直、戦いがある世界ばかりだった。でもいつだってその世界で最初から強かったわけじゃなかった。

特に始めのほうは酷かった。それまで平和な日本でのほほんと暮らしていた俺だ、剣と魔法の世界なんてどこを一番初めに選んだときは随分と苦労した。真つ当な戦い方なんて全然知らない。知っているのは喧嘩の仕方と、スマートな人の殺し方だけ。グロイのが苦手な俺は相手の首の骨を折ったり、肉体や紐、布などの締め技で相手の意識を一瞬で刈り取りそのまま命まで刈り取る方法だったり、アイスピックや、レイピアのような先端が細くとがったもので心臓を一突きにしあまり血が出ないように事を済ます手段しかやろうとしなかった。

でもそれじゃあの世界では生き抜くことは出来なかった。だから俺は学んだ。戦い方を、ありとあらゆる戦術を。長い長い繰り返し転生人生でそこから自分にあつた戦い方を作り上げながら、新しい力を貪欲に求めそこから又新しいスタイルを獲得しながら。

そして、その世界ごとの自分にあつた最適化をしてきた。

世界には理「ことわり」がある。

この世界では人外な力を発揮できるほど人間に氣は無いし、魔力なんてものも無い。ならばここで生まれた俺にそれらを使う技術があるうが魔法なんてものは使えない。今の俺が持っているものは自身の肉体を使った戦闘経験と、戦闘機を初めとしたいいくつかの口ボ

ット操縦技術だ。

そしてそこにISを使った経験は無い。

ならばそれをものにするのに時間がかかるのは当たり前だった。

ハイパーセンサー一つをとっても気配の察知ではなく360°が視認できることや、氣や魔力での強化も無しに遠くを見ることが出来るなど違和感が凄まじかった。

単なる飛行でもそう。慣性制御能力が高いので本来かかると想像していたGが軽すぎて動きがブレたりと、なまじISを使わない戦闘技術の経験が多いことが足を引っ張ったくらいだ。

そして俺が強くなるのに時間がかかった一番の理由。過去の肉体との齟齬。これが結構洒落になってなかった。

俺がISの訓練を始めたのは先に言ったように一夏が初めてISを動かした日からすぐだった。その時の俺の年齢は15歳。正直まだまだ肉体が完成されておらず、それに伴い過去の肉体で出来たこと出来なかったこと、今の肉体で出来ること出来ないこと等のすり合わせがまだ十分とはいえない状態だった。しかし、そんな泣き言が言っていられないのが俺のおかれた立ち位置だったので、それまでは過去の膨大な戦闘経験によって得られた経験則というもので誤魔化し誤魔化しやってきていたのだ。

ところがそこにISで、という追加条件が来た。いまだに既知^{過去}とのすり合わせも十分に出来てないところに未知^{IS}のものが加わった訓練は、俺から経験則による誤魔化しと言う鍍金^{メッキ}をいとも簡単に剥がす結果となった。

ただ、俺が男と言うことでIS適正が低いために訓練状況が芳しくない^と、周りには思われたようで今まで俺が培ってきた足場が瓦解することは無かった。

それどころか、一日二十四時間のうち自己流の訓練に時間をたっぷり^とと割く事を許されたおかげで過去の肉体とのすり合わせをする時間がむしろ以前より大幅に増えたのは僥倖^ただっただろう。

おかげで今はこの肉体のポテンシャルも把握し、ISを使用した

行動でも十分な成果を出すことが出来るようになった。

何を隠そう、肉体のすり合わせが終わり齟齬が無くなってISの訓練の成果が急な成長を見せ始めたときに第二形態移行したのだから、俺の相棒のお墨付きと言えるだろう。

随分と長い言い回しになってしまったが、俺が言いたかったのは一つ。

俺の強さはそこまでしてやっと手に入れたものだということ。つまるところ俺は天才と言われるような存在じゃ無かったってこと。凡才と言われてもおかしくない俺が時間をかけ秀才となり、そのかった時間を知らない者達が俺を天才と呼ぶ。今の俺が回りから天才のごとく写るのはそれだけの時間を過ごしてきたからに過ぎない。俺が俺のことにに関して言いたかったのはそれだけ。じゃあなんで今こんなことを考えることにしたのか。言ってみればなんてことはない。ある種の嫉妬心を自身の中で、自身の積み上げてきた自信でもって受け止め納得し消化しようとして努力しているだけ。

俺が一体何に嫉妬しているのか、それは他の誰でもない。

主人公
織斑一夏に対してだ。

彼を表す言葉は天才、彼はまさしくIS操縦者として天性の才を持っている。

俺は一夏とセシリアの戦いの記録映像を真耶に頼んで見せてもらった。そこに映っていたのは異常。

この世界の中で代表候補生であるセシリアと、初めて使う初期化も最適化も終わっていない、どういった性能、装備があるかも知らないISでましてや一時間とISを使ったことが無いというのにあるほどの戦いが、いやそれどころか勝ってしまいそうな状況になるものがどれだけ居ると言うのか。

全く持って天才と言う外無い。

ふう…… やつと落ち着いた。ま、そんな訳で俺は一夏を教導するのには適さないって訳だ。

俺は一般的な学力と言う意味での教えると言うことに關してはそれなりに自信があるが。ISやスポーツのように才能が大きなウエイトを締めるものに関しては、俺と同じ凡才しかその教導の仕方が分からない。正確には天才に同じ事をしてても効果は有るだろうが、時間の無駄が多すぎるのだ。

凡才ならば一から十まで教えることが天才相手だと一だけで済んでしまう。二から十が無駄になってしまふのだ。これは非常に効率が悪い。だから俺は一夏を真つ当に教導するのに適さない。

だから俺が一夏にしてやれるのはとにかく戦って戦って戦いを繰り返して経験を積ませてやることだけだろう。

きつちとした本物の教導はあの馬鹿女の仕事だ。

俺に出来るのは泥臭い方法だけ……か。まったくスマートじゃねえよなあ……

まったく、やれやれだぜ……

うん、わかってるよ。ここまでの独白が現実逃避だって事ぐらい。

でも、いいじゃないか逃げたって。人間だもの by かつせい

え？ 随分と余裕だなんて？ いやいや……

めっ ちゃ テン パ っ て ま す よ ？

どうしてこうなった！？

なんでこうなった！？

帰ってくるのが早すぎたというのか!?

くそ! このままでは俺の心がイグニッション・ブーストしてしまっ……!

どうすればいいんだ!?

もう……ゴールしても良いですか……?

第10話

シャワーを済ませた俺は部屋の鍵を開けドアをくぐり開口一番こ
う言った。

「たっただいまー、一夏もうきてるかー？」

と、そこで俺の目に入っただのはしつとりと濡れている髪を下ろし、
体にバスタオルを巻いているだけのシャルルが手に新しいボディー
ソープを持って、こちらを向いて固まっている姿だった。

中世の時代の？大人な子供？ならばともかく、現代の15歳とち
よつとの少女にあるはずもない色気を彼女の姿から感じ取ってしま
った俺は刹那の間意識がどこかへ逝ってしまっていた様だ。

幾たびも転生を繰り返し、精神は転生のたびに肉体と共に成長す
るようリセットしているとはいえ。その記録に基づく経験から、女
の色気が出てくるのは30歳、早くても20代後半から、を理論と
している俺だったが……どうやら彼女は俺視点では別格のようだ。
色気と言ってもその質は色々有るだろう。妖艶と可憐といったよ
うな性質の異なる色気だつてある。

そして彼女が纏うは可憐の二文字。もはや言葉にするのもはばか
れるとも表現できるその姿……

いかん、どうもまだ頭がおかしくなっているようだ。幸いこうい
った突発的な事態が起こるとき表情を一切崩すことが無いという特

技のおかげで、彼女からは俺が阿呆なことを考えているとは気付かれていないようだ。

さて、こうして頭で考え事をしているだけでは事態は動かないな。

「あゝシャルル、そんな格好のままだと風引くぞ？ ボディーソープがきれてたんだろ？ 回収したならシャワー浴びなおしてこい……よ……」

俺がいつもと変わらない調子でそう話しかけると、ぱさり……とシャルルの体を包んでいたタオルが落ち、彼女の生まれたままの姿を俺の前にさらすこととなった。

「……ひゃっ！ っ！！」

「大声を上げるのは拙い！」

裸を見られたことで大声を上げそうになった彼女の口をとっさに手でふさぎ、そのまま抱きしめるような形で引き寄せ、勢いそのままにシャワー室へと押し込みドアを閉めたところで一息吐き。

ドア越しにシャルルに話しかける。

「とりあえず、ゆっくりとシャワーを浴びて。落ち着いたら出て来い」

とだけ言っただけ俺はベッドへとうつぶせに寝転んだ。

シャルルからの返事は無かったが、シャワーの音が聞こえ始めたのでとりあえずはよしとする。

「わるい、ちょっと遅くなったか？」

と、この後どうしたもんかと考えていたところに一夏が部屋に入

ってきた。原作だとそこまで時間を取られていない様に感じたからこそ、今回の件を考え付いたのだが、どうやらそこそこの時間を取られていたようだ。

「いや、大丈夫だ。ある意味ダイジョバ無かったんだけどな……」

「ん？　どうかしたのか？」

「いや、なんでもない。それより結構時間がかかったんだな。何かトラブルでもあったのか？」

「いや、書類に名前を書くだけだったからそこまで時間取られないと思ってたんだけど。ほらセシリアのISって山田先生に預けて、ダメージレベル調べたりした後今度は整備科行きだろ？　俺の白式の場合どうなるのかなって思ってた。そのこと聞いてたんだ。俺の場合は山田先生と整備科担当の教員の人がやってくれるみたいだった」

「なるほどね」

遅れたのはそういう理由だったのか……これも一種のバタフライ効果ってやつか。

「シャルルはまだシャワーなのか？」

「ん？　ああ……悪いんだが検討会はお預けだ。ちょっとばかし違う話をする必要が出てきたから……とりあえずシャルルを待とう」

「あ、ああ分かった」

シャルルの男装バレの内容が予定と変わってしまったが、このまま俺も一夏もいる状態でやってしまおう。

シャルルが出てきたら一夏もいることでまた驚きそうだが、そこはスルーしてもらおう。大声さえ出さなければ何とかなる。

俺の言葉で妙な雰囲気を感じ取ったのか一夏は特に何かを話すわ

けでもなく黙っていたので、とりあえず湯飲みを三つ出してそのうちの二つにお茶をいれ、一つを一夏に渡し一息いれながらシャルルが出てくるのを待つ。

しばらくしてシャルルが出てきたのだが、やはりその胸元は今までつけていた特殊コルセットをはずしてしつかりと膨らんでいた。

それをみた一夏は驚いて言葉もないようだったが、一夏の姿を見たシャルルもそれは同様だったようで二人して俺の方を見てきた。

「一夏、驚くのは当然だろうが見て分かるようにシャルルは実は男じゃなくて女だったんだ。そしてシャルル、この件は一夏にも知ってもらっておいたほうが良いと思ってな、今後のことを考えると……な」

「そっか……」

ひとまず二人の視線にそう答えた後、シャルルにもお茶を渡しベッドに座りなおす。ん？ お茶を渡したときのイベントは起きませんでしたよ？ 湯飲みを渡すときに俺は上の方を釣るようにして持っていたからね。

シャルルはついさつき俺に裸を見られたり、そのあと抱きしめられたことでまともに俺のほうを見れないようになってるし。一夏はいまだに整理がつかないのか視線があちこち動いているみたいだし、これは俺から話し始めないと駄目かな？ って思っていると意を決したのか一夏が口を開いた。

「それで、なんで男のフリなんかしていたんだ？」

「それは、その……実家の方からそうしろって言われて……」

「うん？ 実家っていうと？ あれそういえばデュノアってどこかで聞いたような……」

「うん。僕の家だよ。一応フランスで一番大きいIS関係の企業だ

と思う。そして父がね、社長をしてるんだ。その人からの直接の命令なんだよ」

やはり家の話をするのは辛いのだろうか、シャルルの言葉には力が無い。一夏もシャルルの表情に違和感を感じているのだろう。不思議そうな顔をして話を続けた。

「命令って……親だろう？　なんでそんな——」

「僕はね。愛人の子なんだよ」

一夏はその言葉に絶句し呆然とした表情をはつきりと浮かべたが、すぐに顔を引き締めシャルルの言葉を静かに待った。

「引き取られたのが二年前。ちょうどお母さんが亡くなったときにね、父の部下がやってきたの。それで色々と検査をする過程でIS適正が高いことがわかって、非公式ではあったけれどデュノア社のテストパイロットをやることになってね」

そうやってシャルルは力なく独白に近い形で話し続けた。

本低でのこと、デュノア社の経営危機のこと、シャルルが男装してIS学園に入学してきたその理由、そして今後起きるであろう自分への処置についても。

そして、そんなシャルルを取り巻く環境に一夏が憤りを感じないわけが無かった。一夏は声を荒げ、自分の身の上のことと話した上で最後に特記事項の話をはじめ、いままでずっとそのやり取りを静かに聴いていた俺はそこで始めて口を開くことにした。

「——つまり、この学園にいれば、すくなくとも三年間は大丈夫だろ？　それだけ時間があれば、なんとかなる方法だって見つけられる。別に急ぐ必要だつてないだろ」

「それに……」

いままで何も言っただけでなかった俺が急に話し始めたことで二人は若干驚いたように俺のほうを向いた。そのことに苦笑しながら俺は、今までの話を聞いていて改めてずっと気になっていたことを話すことにした。

「シャルルはだいぶ嫌っているようだが、親父さんがシャルルのことを嫌っていたり、道具のように扱っているとしても道具だと思っているかは別物だしな」

「……どうということ？」

シャルルは一体何のことを言っているのだらうと、つぶやくように俺に聞いてきた。

「頭から順番に話していこうか。まずはシャルルのお母さんが亡くなったてすぐの話。なんでデュノアの社長はシャルルを引き取りにきたんだらうな？ シャルルが男としてIS学園に入学できたことから考えても愛人の子供であるシャルルはデュノアとの関係を巧妙に隠されていたはずだ。引き取らずに放っておくこともできたんじゃないのか？」

二人は俺が言った冷酷な話に面食らったようだが、一夏はいち早く回復し何かを言おうとした、が。俺はそれを先んじて話を続けることで食い止める。

「二人が話していた子供を道具のように扱う人間なら、その可能性も有った気がするんだがな」

「でも、それはシャルルのIS適正が高かったから！」

「IS適正の高さは引き取られた後の検査で分かったことだらう？」

引き取った段階では愛人の子供というだけの理由しかないだろう。まあ道具として扱いやすい、という言葉が付く可能性は有るがな」
「な！　っ！」

一夏は俺の言葉にすでに沸騰寸前だ、一方シャルルの方は俺の話の続きを待っているのか少し、ほんの少しだが目に力が入っていた。

「それが最初の疑問。次が本邸での話と正妻の話。ISを取り巻く環境がかなりシビアなのは知っているだろう？　そしてそれに関わる企業のトップ周りと言えば裏のキナ臭さも他の企業よりも一押しだ。当然、お抱えもいるだろうな。さて、そんな中気に食わない人間が現れ、それが社会的に隠された人間だったら、それをどうにかできる人間がいたらどう行動するんだろうな？」

シャルルの方は今の話をしっかりと理解できたようだが、一夏のほうは誘拐されたこともあってそれなりだが全部と言うわけにはいかなかったようだ。

「その気に食わない子供が自分の旦那と仲良くしていたら、子供が産めていないその人は何を考えちまうんだろうな？　そして、その可能性に気付いた旦那は子供を守るためにどう行動するんだろうな？」

「あの人が、僕を守るために……？」

「あえてシャルルを遠ざけることで嫁さんの目から遠ざけ、秘密裏とはいえIS操縦者、それもデュノア社に貢献するテストパイロットにすることで得られる社会的立場。そして極め付けがIS学園への入学だ」

ここまで来ると一夏にはもうちんぷんかんぷんになってしまったのか、今は俺の話の続きを聞くことに集中しているようだ。

「男装してIS学園に入学ねえ……シャルルがフランスの代表候補生になったのって男でISを動かせるってのが全く関係無い訳じゃないだろうが、それ以前にシャルルの腕前が良かったからだろう？でもシャルルがIS操縦者だったのは非公式で、表舞台に出てきたのは男装をしてからだ。さて一夏、今のところ実におかしな点があるんだが。なんだか分かるか？」

いきなりの質問に一夏はちょっと驚いたものの直ぐに考え始めそして答えた。

「シャルルの腕が良いのは非公式であつてもずっと訓練をしていたからだろう？ 男装したからって腕が落ちるわけじゃないんだから別におかしなところは無いんじゃないのか？」

「それがな一夏、あるんだよ。いいか一夏、世間的に見て世界で初めてISを動かしたのは誰だ？」

「俺だろ？」

「そう、そしてそれは何時の話だ」

「いつって、俺が藍越学園の入試の日だから——」

「その日からISを動かしたとしてシャルルレベルに強くなって代候補生って普通考えられないだろ？ 『だいぶ前からISを動かしていました』って自分から言っているようなものじゃないか？」

「そう、まるでそのことに気付いて欲しいみたいに」

そう、もしシャルルのことが特異ケースで秘匿されていたと言う設定なら代表候補生になったと言うのもそう気にならないことなのかもしれない。だけどそれだとデュノア社の現状に説明が付かない。男性IS操縦者を確保しているというアドバンテージは国から莫大な予算を与えられる格好の材料だ。もしこの設定を使うのであればデュノア社が経営危機に陥っているというのはおかしい。経営危

機も本当はそうではなく設定だとすると考えられるかもしれないが、そもそもそんなことにするメリットが少なすぎる。

だとするならやはりシャルルは、織斑一夏がISを動かしたと言う得意ケースを持つて男性へ検査を行った結果発覚した新たな男性IS操縦者という設定にするのが妥当だろう。

そしてそれが先に述べたシャルルの強さと代表候補生という不自然さを生み出す。

つまるところシャルルがIS学園に入学する理由が欲しかったのだろう。一夏も言った特記事項のことも一切合財理解したうえで。

整理すると、IS操縦者、代表候補生、専用機持ち、IS学園の生徒、男装したことで周りの目にさらされその存在が表に出てきたこれらすべてがシャルルを守る盾となる。要するに女だとばれるのも計算のうちなのだろう。

付け加えるなら、シャルルが女の子だとばれる前に政府と何らかの交渉をしておくつもりだったのかもしれない。主にシャルルの戸籍に関して。

まあ、ここで言ったのはあくまで可能性。シャルルの父親であるデュノア社の社長が実は娘思いの良い人だったらというif—もしも—の話でしかない。

だから実際はシャルルたちが言ったようにシャルルのことを道具としてしか見ていない人かもしれない。だがそれもあくまで可能性であって絶対じゃない。

人の心なんて他の人から見れば見方しだいでどうとでもとれるのだから。

「俺が言いたかったのはその人を恨んで憎んで過ごすだけじゃなく、俺が言った可能性も考慮したうえで一度しっかりと親父さんと向き合ってみたらどうだってこと。まあどっちの可能性にしる会ってくれない可能性のほうが高いだろうけどな。最低でもそんなことはもうどうでもいいって言える様になったほうが良いな。人を怨み続

けて生きるってのは結構疲れるぜ？」

俺がそう締めくくると二人とも下を向いて黙ってしまった。まったくそんなに湿っぽく考えるなよ。俺はつまらんことを考えてないで前向いて行こうぜって言っているってのに。

「さ、そろそろ飯食いに行こうぜ」

「カツ……」

「ん？ どうした？」

「えっと、ありがとね。僕そんな風に考えたこと一度も無かった。あの人のことはまだ受け入れられないけど、それでも前向きにやってみようと思う。」

「そっか」

俺とシャルルはそう言葉を交わし、彼女はうつすらとだが確かにその顔に笑みを浮かべた。

するとそこへ、いささか沈んだ声で一夏が話しかけてきた。

「なあ勝生…… お前は どうして そう思えたんだ？ 俺は そんな風に考えることが出来なかった」

「俺の家族は皆仲が良いからだよ」

俺の短い返しに、一夏もまた、そっか、とだけ返した。

もしかしたら一夏も自分の親が自分達兄弟を捨てた理由に思うところが出来たのかもしれないな。

そうして一連の話に区切りが付いたところで部屋のドアがノックされた。

「勝生さん、デュノアさんいらっしやいまして？ 一夏さんが見当たらないのですが何処にいらっしやるかご存知ありませんこと？」

「どうやら来客はセシリアのようだ。俺たちは苦笑して、一夏はセシリアに返事をした……とても困った返事を。」

「ああここにいろぜセシリア、入って来いよ」

その言葉に俺とシャルルは慌てた。何せ今のシャルルの格好は胸のホルセットをはずしているので一発で女の子とばれてしまうのだ。俺とシャルルの反応でそのことを思い出した一夏も慌てたが。セシリアが部屋に入って俺たちの姿を視界に入れる前に、俺はシャルルをベッドに押し倒した。うつ伏せにな。

「やっと見つけましたわ一夏さん。まだ夕食を取られていないようですけど……あら？ 勝生さん何をなさっていますの？」

「あ、ああ今日ちょっといざこざがあったろ？ だからそれに見事に対処したシャルルをねぎらってやろうと思ってな、マッサージをしているんだ」

そう、今現在俺はシャルルをベッドの上にうつ伏せに押し倒し、その上に膝立ちで馬乗りになっている。膝の位置はシャルルの腋の下にあり、うつ伏せになり押しつぶされた彼女の胸を隠すようにしている。

「そうですね。ところで一夏さん？ わたくしも夕飯はまだですし、ご一緒にしましょう。ええ、ええ、珍しい偶然もあったものです」

「（一夏、行ってこい。ひとまずセシリアをこの場から連れ出して欲しい。こつちのことは気にしないで良いから）」

「（わかった。）じゃあセシリア行こうか。勝生たちはもうちょっとマッサージを続けるみたいだしな」

セシリアのその発言に俺と一夏はとっさにプライベート・チャンネルでやり取りをし、一夏はその流れでセシリアを上手く連れ出してくれた。

セシリアは一夏が素直に行ってくれる上に、俺とシャルルが残り二人きりになれると思ったのか喜色浮かべて一夏と連れ立って行った。

「ふう、なんとかあったか。」

（今出て行ったら多分セシリアと篝のごたごたに巻き込まれるな。ちよつと時間を空けるか。）

俺はそう考えていると、ふとシャルルが押し倒してからずっと何の反応がないことに気付き声を掛けようとも思ったが、それを止めて黙ったままおもむろにシャルルを揉んだ。

「ひゃあー!!」

随分と可愛らしい声を上げてシャルルが動揺しているのが手に取るように分かるのだが。俺はその一切を無視し、そのまま何も語らず強くそれでいて優しく彼女を揉み続けた。

しっかりと、手のひら全体を使い彼女の緊張も溶かしていくようにじっくりと……

「あつ、ん……ちよつ、と、待つて。カツ……」

シャルルは突然の俺の行動に戸惑いを見せ、顔だけを横に振り向いて制止の声を掛けてきた。俺はそれに答えようとシャルルに覆いかぶさるように体を倒し顔を出来るだけ近づけ、彼女の耳元で囁く様に、しかし強い意志を感じさせる声で告げる。

「いいや待てないね、いままで窮屈だったろ？　そしてそれはこれからも続くんだ、だから、今だけは」

力を抜いて俺にその身のすべてを委ねている。

大丈夫。直ぐに気持ちよくなって、体の奥から充足感で満たされるようになる。

俺がそうしてやるから……

「っっっ！！」

俺のその台詞をどう捕らえたのかは分からないが。シャルルは枕に顔をうずめるように下を向いて黙ってしまった。

身体は俺が顔を近づけたときは、これでもかと言うぐらい硬くなっていたが今は大分ほぐれたようだ。

諦めの境地と言うやつなのかな？

（ま、いくら顔を隠しても耳が真っ赤になっちゃっているのは隠せないんだけどね）

耳がここまで真っ赤になっているのであれば顔の方はいかなものかと、気になるな。なんて考えながら俺はシャルルの体を揉み続ける。

心も体もほぐすように、誠心誠意まごころとをこめて邪念を持ちながらしつかりと、自分に出来る最高のマッサージを。

最終的に肩から始めて足までしつかりとマッサージをしておいた。途中しつかりとお尻もマッサージしたんだが、シャルルが何も反応しなかったので、おかしいなと思ったのだが。なんといつの間にか眠ってしまったので、カツのえっち……、なんて台詞を聞くことが出来なかった。残念でならない。いやむしろ良かったのか？

そんなくだらないことを考えながらマッサージを終えた俺は静か

に部屋を後にして食堂へ行き、食事を済ませることにした。

そして自分の食事はサクッと終わらせて、その手に今日の定食物で箸を使うのが一番しっくり来る焼き魚定食を持ち、部屋へと戻ることにした。無論、お盆にはスプーンやナイフにフォークといったものは無く、お箸が一膳あるのみである。

この男、まさに外道！

第11話

あの後、そう俺がシャルルの分の夕飯を部屋にもって帰った後、シャルルは原作のように箸を上手く使うことが出来なかった。

俺はそれを見て、食べさせてやろうか？ と声を掛け良い感じにシャルルが取り乱したのを見て、冗談だちょっとスプーンとかもらって来る、と言って部屋を出ようとした。

ここでシャルルが奥ゆかしさを発揮し、俺を押しとどめ俺が、甘えて良いんだＺＥ、と返すことによつて原作でシャルルと一夏がやっていたような、リア充死ね！ な、キャツキヤうふふなシーンに突入かと思いきや。そのまま呼び止められず部屋の外に出ることになってしまった。

部屋を出て思わず、え？ と声を零してしまった俺を誰が責められようか。

結局おとなしくスプーンとフォーク、あと使うか分からないけどナイフも食堂から借りて、シャルルに渡した。俺がそこでボーっとしていたらシャルルも食事が取りにくいだろうと思って、俺はもう一度シャワーを浴びることにした。何気にシャルルにマッサージしたときに汗かいたんだよね。

シャワーをのんびりと浴びて戻ると、シャルルも食事を終えていたようなんで食器を返しに行った。俺がな。シャルルはコルセット外したままだし。

帰りに自販機で冷たい飲み物を二つ買い、その100%みかんジュースを左右の手に持ちながら部屋に戻る。

二人でそいつを飲んだ後はそのまま就寝。結局何にもイベントと言えるものが無かったところを考えるに、やはり一夏が絡まないと俺はこのIS学園ではただのモブなのだろうか？ ちょっとだけ残念だ。せめてサブキャラぐらいには昇格したいです。

今日は沢山大変なことが起きすぎた。

裸を見られて、抱きしめられて、女だつてばれちゃつて。

そして、一夏とカツに僕の家のことを話して……一夏、真剣な顔をして本気で僕のことを気にかけてくれた、本気で怒ってくれた。ここにいろつて言ってくれた……。

カツも、まさかあんな風にあの人のことを捉えるなんて……あの人が僕のために行動していたとはやっぱり思えない。でも、カツの言ってくれた、人を怨み続けて生きるのは疲れる、って言うのはちゃんと分かった。

二人とも真剣に僕のことを考えてくれていたのがすごく伝わってきて、本当に……うれしかった。

その後は、あわわわ！　今思い出しても顔から火が出ちやいそいだよ。

部屋に一夏を探しに来たオルコットさんが来て、一夏がうつかり部屋に入って良いなんて返事をしちゃうものだから、慌てて……そして、力、カツに、おおおおお、押し倒されて！　馬乗りにまで……！

僕は胸がどきどきいっちゃつて、顔も自分でも分かるくらい熱くなっちゃつて、絶対に真っ赤になつてたと思う。だから恥ずかしくて、枕に顔を押し付けて隠そうとするしか考え付かなくて……。

オルコットさんが一夏を連れて部屋から出て行つても、身体が硬直しちゃつて動けなくて。

そしたら、カツがいきなり肩を揉んできて。おもわず声をあげちゃつて、でもカツがそのままマッサージを続けるから、待つてつて言つたのに。横向きになつた僕の顔に、カツの顔が近づいてきて……

…。

そしたら……あああああ！　力、カツはきつとマッサージのことを言つて、それで別に他の意味はないと思うんだけど。それがべ、別の意味に聞こえちゃって、それを別の意味に捉えちゃっている僕がいて……　つつ……！　もつと顔が熱くなるのが分かって、もう枕に顔をうずめるくらいしか抵抗の方法が思い浮かばなくて。

でも、本当にマッサージは気持ちよくて……　どんどん深みにはまっ
つていくようで……。

だんだんマッサージの位置が下に行くうちにまたパニックになっちゃって、このままだとお尻まで……？！　でも、これはマッサージなんだしそんなことを考える方がおかしいのかな？　とか、でも女の子が男の人にそんなことをされるのはどうなの？　とか考えて頭がぐるぐるしちゃって……　最終的に選んだのが寝たフリだった……。

もう、恥ずかしくて死んじやいそうだった。

マッサージが終わって、カツも夕飯を取りに行ったのか部屋から出て行って。

僕は部屋のドアが閉まる音を聴いた瞬間、跳ね起きて、バクバク言ってる心臓をどうにか鎮めようとするのに必死になった。

さっきの出来事は、その前に話していた家のことを完全に、頭から追い出すほど衝撃的で、本当に気持ちを静めるのに時間がかかった。うん、だって大分落ち着いたときにはカツが部屋に戻ってきたんだもん。

カツが持つてきてくれた夕飯のトレイにはお箸しかなかった。僕がお箸を上手く使えないのを見て、カツが声を掛けてきた。その言葉に僕はまた動揺することになったちゃって、で、でもそれもいいかな？　って思ったら、カツは冗談だっていってスプーンとかもらってくるって言ってさっさと部屋から出て行っちゃった。……　もうカツってば意地悪だ。

カツが戻ってきた後も僕はまたしてもパニックに陥ることになっ

た。だ、だって、カツつてはいきなりシャワーを浴び始めるんだもの！ 僕はそれのせいで色々考えちゃって、もう何がなんだか分からなくなつて、ご飯の味なんて全然分からなくなつてた。

ど、どういふつもりでシャワーなんて浴びたんだろうって思つてたら、カツは何事も無かつたようにトレーを食堂に返しに行つて、その帰りにジュースを買つてきてくれて、それを飲んだら直ぐに寝ちゃつた。

……もちろん期待していたわけじゃない。もし……もしものときはISを展開してでも抵抗するつもりだったけど、何のアクションも起こされないと逆にそれはそれでムつてなつちゃう。

もしかして女として見られてない？ そういえば僕の裸を見たどころかその後抱きしめたりしたのに、僕がシャワーから出てきた後も平然とした顔をしてたし。マッサージのときも躊躇無くお尻を揉んできたし。食べさせてやろうか、なんて冗談まで……あれ？ これって完全に異性として眼中に無い状態なんじゃないかな？

そう思つたら、なんだか一人で悶々としていたのが馬鹿馬鹿しくなつて、それでいてちよつと腹立たしくなつてそのまま眠つてしまつた。

カツのバカ……。

後書き

結局ストーリーは進まず、間幕を投稿する事に……。

内容としては、イベントは起こりかけていたもののオリ主が自分でスルーしていたと。

この作品のシャルは若干セシリアのようなちよろい度やデレ度が
高いです。

そういうものだとして読んで下さい。

そんなシャルも良いじゃない。

バトルパートも書きたいけど、じっくり話を進めるのが作者は好きなので、物語りはまだまだゆっくりと進行していきます。悪しからず。

それにしても、やっぱり感想や評価をしてくださいとか書いたほうが良いのかねえ？ 自分としてはそういうのを書くのはどうよ？
って思うのですが、書かないと評価してもらえない↓ポイント上がらないと多くの人の目に留まらない↓アドバイスがもらえない。
と、なるとそれはそれで困るんですよね〜。ジレンマです。

そして、本文中に後書きを書いているのって、分量を水増ししているような気がして自分でもどうかと思う。でも、携帯で読むとき後書きがあると、邪魔なんですよね〜。これもジレンマ。

第12話

「そ、それは本当ですよ!？」

「う、ウソついてないでしょうね!？」

月曜の朝、俺とシャルルは食堂で一夏と合流し一緒に教室に向かっていた。そんな時、廊下にいる俺たちにまで聞こえる声にシャルルと一夏は目をしばたかせていた。

俺は、あああれか……と思い出し、一夏たちが噂話をしている女の子達の方へ行くのを横目に俺は噂を捻じ曲げて流した張本人の方へと歩を進める。

「んで？　どという噂を流したんだ？」

正直予想外だった、いや想像してしかるべきことに俺が目をそらしていたと言うところだろうか。あの馬鹿女がこの俺をおちよくって遊ばないわけが無かったのだ。

つまるところ噂の内容はこうだった。

『学年別トーナメントの優勝者は織斑一夏、シャルル・デュノア、戦場勝生の誰か一人と交際できる』

原作ではシャルルがいても条件のなかにシャルルは入っていないかったから、俺がいるここでも景品状態になるのは一夏だけだと思っていた。

まず間違いなくこんな噂になったのはあの女が^{アマ}テコ入れを本来よりも多くしたからだろう。一夏は原因となった第との会話から元々

景品になったとして。俺はそれを面白がったあいつがその中に俺を付け加えて、それが不自然にならないようにシャルルも巻き添えにしたと言うところだろう。

文句を言いに行きたいところだが、一応今はまだ接触をしないほうが良い、と言うか向こうからの接触が無い限り現状維持とあらかじめ決めてあったのでそれも出来ない。

あいつめ、それも計算のうちなんだろうな……

まあいい、この後の展開が原作通りならトーナメントは中止だし。たとえそうならなくてもなんとかやむやにしまえば良い。俺が優勝しないとも限らないわけだしな。と言うか、正直俺はこの学年の中で確実に一番強いしな。

しかし、俺が勝ち進み一夏とラウラが戦わない場合。ラウラが他に負けるとは思えないしラウラとは戦うことになるな。となると結局トーナメントは中止になるのか？

いやあれは一夏が相手チームにいたから暴走したとも考えられるし、俺が相手ならVTシステムが発動しないかもしれない。まあそれはその時考えればいいか。

さて放課後、あの噂がセシリアと鈴の耳に入った今日があのでラウラ乱入イベントの日なのだろうと当たりをつけて、俺は授業が終わると直ぐに第三アリーナへと向かった。

実は俺は一夏たちの訓練には時々しか参加していない。指導はシャルルに任せているのでやるのが殆どないのだ。模擬戦をやる場合は一夏から誘ってくるので、一夏に経験を積ませるのも問題ない。なので、気が向いたときか誘われたときにしか参加していない。そうしないとやってられないのだ。シャルルは一夏にきちんと指導

しているのもそうでもないのだが。特に何もしない俺と一緒にいると、箒と鈴に物凄い睨まれるのだ。一夏との時間を邪魔するな！と視線が物凄い。というか、何でいるの？ とはつきり言われた。あれ？ 流石にここまでひどいこと言うようなキャラじゃなかったと思うんだけど。うーん、シャルルだけじゃなく俺までいることで余計に一夏との時間が削れたせいで焦っているのかな？

シャルルは女の子だからその嫉妬のこもった視線も何気にスルーできるんだろうけど。男の俺としては一夏と一緒にいることで嫉妬に晒されるとかマジで勘弁して欲しい。

ちなみにセシリアからは無いとは言わないが箒と鈴ほど邪険に扱われていない。やはり模擬戦で力を示したのが効いているのだろう。まあ彼女はよくちよろいさんとか言われているが、あくまで一夏一筋のようだ。俺が勝ったからといって俺に惚れるような事は無かった。

とまあ、何気に俺の中でのセシリアに対する好感度は結構高め。俺のことを邪険に扱わないことといい、一夏一筋なところといい、俺のことを邪険に扱わないところなんか、実に良い子だろう。高飛車な性格はもはや見る影もないようだしな。

なのでそんな子がこれからボロボロになるっていうのはちよつと見過ごせない。ラウラと戦うこと、そして負けてしまうことはそれもまた経験となるので構わないが、ISの操縦者^{デッドゾーン}生命危険域に行くまで痛めつけられるというのは俺の心情的な問題として見過ごせない。

だから、勝敗が決したと思ったら直ぐにでも止めに入るつもりだ。AIC対策も俺にはあることだしな。

さて、着いたわけだが……おーおー派手にやってんねえ。俺も結構急いできたはずんだけど、もう始まってるって彼女たちはドンだけ早く来たのさ……。

うわぁ……マジで甲龍の衝撃砲をAICで無力化していやがる。

不可視の攻撃を無力が出来てるってことはエネルギー波を壁状に展開してるって事か……やっぱり黒衣のAICとは違うよね。こっちはAICって言うてもやってること殆どパッシブだしな。

っとそろそろヤバイな……。

戦いはラウラ・ボーデヴィツヒがセシリア・オルコットと凰鈴音の二人を圧倒していた。たしかにラウラも無傷ではいらなかったが、二人の受けたダメージはそれと比べるまでも無く大きなものだった。

二対一という状況でありながらその高い戦闘力を存分に発揮したラウラは、その状況を全く苦にせず二人を追い詰めていく。

そして鈴は一瞬の判断ミスから窮地に立たされ、そこをセシリアが援護した。

鈴とラウラの間に割り入ったセシリアが放ったミサイルは、ラウラのAICに阻まれダメージが通ることは無かった。逆に爆風によってセシリアと鈴は地面へと叩きつけられた上に、肝心のラウラへのダメージが無かったことに気を取られたせいでラウラの瞬時加速への反応が遅れた。

鈴は蹴り飛ばされ、セシリアは至近距離からの砲撃を受け吹き飛んだ。ラウラはその二人に対しワイヤーブレードを射出し追撃をかけようとする。

だがそれは乱入者の存在によって防がれることとなった。

「ふっ！」

乱入者は突如としてラウラとセシリアたちの間に現れ、四本のワ

イヤーブレードそのすべてを左手に持った近接ブレードで一息に弾いて見せた。

「ここらでお開きとしようぜ、ボーデヴィツヒ。この勝負はお前の勝ちだ。それで終いだ。いいだろ？」

乱入者・戦場勝生は左手に持った正宗の切っ先を下ろし、ラウラ・ボーデヴィツヒに向かってこの模擬戦の勝敗を問うた。

だがその問答は彼女のお気に召さなかったようだった。

「ふん、まあいい雑魚は放っておいてやろう。だが貴様、私の戦いに割り込んでおいて無事で済むと思っっているのではないだろうな！」

その声と同時にラウラのISシユヴァルツェア・レーゲンの右肩にあるレールガン《ブリッツ》が火を噴いた。

勝生はそれを後方上空へと後方宙返りの要領で緊急回避し、正宗を収納しそのまま両手に魔晄を展開。右から実弾、左からレーザービームを射出する。

実弾だけであつたならばAICで防ぐことも可能だったのだろうが、ビームは防ぐことが出来ないため。ラウラはそのまま後方へと滑るように回避し、勝生に向けてイヤーブレードを六本射出して反撃に出た。

イヤーブレードは二本が正面から、残る四本が弧を描きながら勝生を囲むように迫り彼の四肢に狙いを定め迫っていた。

それに対し勝生は両手の魔晄を収納し、左右の腰部下にそれぞれ二本ずつ前後に格納されている苦無の内、後ろにあるものを両手に持ち替え、AICを応用し足場として使うことの出来る力場を発生させる技術、通称>跳梁無尽ちようりやうむじんによりラウラへと一直線に加速。

正面から来る二本のイヤーブレードを左右の苦無で持つて先端を弾く事により軌道を逸らし、弧を描いて迫るイヤーブレードは

加速した勝生を捉えきれず後ろへと流れていく。

勝生はワイヤーブレードを弾くとすぐさま右の苦無をラウラの顔めがけて、左の苦無をラウラの足元へ投擲。

ラウラはそれをAICを使うまでも無いと判断し、右手のプラズマ刀でもって弾き迫る勝生を迎え撃つ体制を取る。

しかし投擲された二本の苦無から突如として煙が溢れ出し、視界のすべてが黒く染まった。本来ならたとえ視界が黒く染まろうが、ハイパーセンサーの働きによって充分に視界は確保され敵を見失う様なことは無かっただろう。だがその煙幕は内包された特殊な粉塵の働きによってハイパーセンサーの動作を阻害する能力があった。

しかし、勝生のIS黒衣は当然のごとく対策が施されており、その強化されたハイパーセンサーは煙幕の中のラウラをしっかりと捉えていた。

突如として煙があふれ出し視界を覆われ、ハイパーセンサーまでもが使い物にならなくなった状況にラウラは身を硬くしてしまった。次の瞬間には彼女は胸に強い衝撃を受け吹き飛び、地面を数回バウンドすることとなった。

勝生が動きを止めてしまったラウラに対し勢いそのままに180°前転し、容赦の無い蹴りを浴びせたのだ。

勝生は跳び蹴りの勢いそのまま煙幕の中から抜け出し、地面へと足で線を引きながら着地した。そして地面を滑る間に両手に展開した魔晄を連結させると、吹き飛んだラウラへと照準を向ける。

「そこまでだ！ 戦場、銃を下ろせ！」

今まさに引き金を引こうとした時、制止の声がアリーナに響き渡った。

戦場はその声の主を確信しつつ、声が掛けられた方向を見るとそこにはこちらに歩いてくる織斑千冬の姿があった。

「暴れすぎだこの馬鹿者が、ここはお前達だけが使っている訳ではないんだぞ」

「すいません、織斑先生。ちょっと楽しくなっちゃって」

「全く、お前と言うやつは……まあいい。お前からこの戦いの決着は学年別トーナメントでつけろ、いいな」

「わかりました」

「……………教官が、そう、仰るのなら」

いつの間にかラウラもこちらへと来ていたが、その回答は勝生に対するものや、千冬の前で醜態を晒してしまったことに対する怒りで声が震えていた。

そしてその返答をもって、千冬はアリーナにいる全生徒へ向けて大声で、学年別トーナメントまで私闘の一切を禁ずることを告げ、解散を促した。

俺はその後、セシリアと鈴の様子を確認すると、二人は一夏とシヤルルに介抱されているところだった。

どうやらひどい怪我も無い様だし、ISのダメージレベルもBを超えていないだろう。あれなら学年別トーナメントにも間に合うことだろう。

そんなことを考えながら俺は皆がいるところへと歩を進めていった。

第13話

その後、セシリアと鈴の二人を保健室へと連れて行った俺たちは保険医の先生が二人の手当てをする間外で待つことになった。

「それにしても二人とも怪我とか無いみたいだったし、よかったぜ」
「まあ、なんとか機体維持警告域前に割り込むことが出来たからな
だが相対^{あいたい}して解^{レドゾーン}ったが、ラウラ・ボーデヴィツヒは力に酔い飲み込まれている性質^{タチ}だな。あのまま放っておいたら今頃二人は大怪我どころか死んでいたかも知れん」

正直な話これに関してはもし俺に原作知識が無かったとしてもそう感じたと思う。俺が割り込んだとき、ラウラの瞳には愉悦の色がはつきりと見て取れた。あれは予想以上だった。

原作でかなりあっさり^とと気持ち^をを切り替えていたからそこまで根の深いものではないのかとも思ったが、ところがぎゅっちゃん。アレはかなり拙いレベルだ。

いやほんと、アレがどうしてこうしてどうやってたら原作のようになるのであるのか？ マジで誰か教えてくれ。とりあえず一夏さんマジばねっす。

と、しばらくすると保険医の先生が中に入っても良いと言ってくれたのでシャルルと一夏は中へ入り、俺は飲み物を買ってくると言っ^てて自販機へと向かう。

俺はこれからのことを考えていた。セシリアと鈴は無事に学年別トーナメントに参加できるだろう、そのことが与える原作への影響そして、俺がここにいるという俺自身が原作に与える影響がどれほどあるのかということ。

一夏には原作通りシャルルとペアを組んでもらったほうが良いのかどうか。考えることが多い。

「まあ、そのあたりはあちらさんがどうにかする……してくれる、かな？」

飲み物を人数分、すべて違うもので購入し保健室に戻ると、そこは混沌としていた。本当はもつと早く戻る予定だったのだが、保健室に戻る途中で女生徒達に足止めを喰らったのだ。

学年別トーナメントがペアでの参加となった。

それで一緒に参加しませんか？ という誘いだ。俺にその話を持ってきた女の子達にシャルルと一夏が組むことになったのを聞いた俺は原作通りになったかと思っただが、よくよく考えるとじゃあ俺は誰と組むべきなんだ？ 他に女の子しかいないこの学園で。

そこで俺は女の子達にはペアを決める予定は無い。ペアが決まらなかった人は抽選としてあるようだから運、というか縁に身を任せることにする。と、かわしておいた。これで、あちらも仕込が楽になるだろう。

保健室に戻るとそこは混沌の坩堝だった。セシリアと鈴、そしてなぜかここにいる篤までが加わって一夏に詰め寄っている。

事情にあたりはついていっているものの一応の確認の意味も含めて、シャルルに何事かを聞くと。内容は当然のごとくトーナメントでのペアのことだった。

一夏がシャルルと組むことをさっさと決めてしまったのが気に食わないらしい。うむ、この光景はなんだ、あれだな。原作でも思っていたんだが結構理不尽に一夏が可哀想だな。

よく聞く話ではこういう光景をみた人たちはリア充モゲロとか言

うらしいが。いちゃいちゃした雰囲気ならともかくこんな混沌とした空気だとむしろ愁傷様じゃね？

俺とシャルルはその後黙ってそのやり取りを傍観していたんだが、しばらくしてセシリアが何かに気付いたように、ハッと顔を上げて一人俺の方へ向きこんなことを口にした。

「んん！ まったく一夏さんは……仕方ありませんわね、では勝生さん貴方、わたくしと組みませんか？」

「あゝすまんセシリア。さっきここに来るまでにあった女の子達に俺と組みたい人は抽選での運に任せるように言っちゃったんだ。だから俺は誰かとあらかじめペアを組むことはできん、悪いな」

「そ、そうですね……残念ですわね」

「ま、縁があれば組むことにもなるだろうさ。つかそうなったら優勝はいただきだな」

俺のその言葉でセシリアが何故俺と組もうとしたのかが解らなかった鈴と篤は彼女の真意に気付き、ある意味抜け駆けをしようとしたセシリアを一睨みした。

その後は、一夏が3人を必死で宥めて保健室から撤退。夕食を済ませると俺とシャルルの部屋にあつまった。一夏の部屋を使わないのはあの部屋は乱入者が多すぎるからだ。

で、部屋に着くなりシャルルが俺が保健室にいない間にあった事について一夏にお礼を言っていた。原作であった、シャルルが女だとばれないように一夏がペアに彼女を選んだ件の様だ。

つかその後の会話の凄まじさ。ハンパねえっす。俺もここにいます。というのに全力で砂糖を吐きそうな空間が出来上がっています。

その後の着替えイベント？ 一夏の部屋へ行くことで回避ですよ？

勝生と一夏が部屋を出て行くとシャルルは勝生が部屋から出て行くときの言葉通り、シャワーを浴びて寝巻きへと着替えを終える。その最中にも考えるのは一夏のこと。自分の心を揺さぶる彼のことを考えるとシャルルは自身の感情が様々な様相を見せ、一つにならないことを自覚していた。

そのままざわめく心を持て余したまま、シャルルはベッドに横になり目を閉じる。なかなか寝付けないでいると勝生が帰ってきた。

勝生は部屋へ帰ってくるとそのままシャワーを浴びることにしよう。先に寝ておけと言われていたし、起きていたらむしろ勝生が困るかな？ そう思ったシャルルはそのまま寝付こうとすることにした。

しかし、眠れない。よくよく考えると自分が使ったシャワー室を年の変わらない男が使っているのだ。なんだかすごく恥ずかしくなり、シャワーの音がやけに耳につく。それがまたシャルルの恥ずかしさを助長し、眠気が遠のく。

何とか心を落ち着かせようと何処をどう頑張ったのが功を奏したのかは解らないが、勝生がシャワールームから出てくる時には赤くなっていた顔は元に戻っていた。

すると隣のベッドに腰掛けたであろう勝生が口を開いた。

「……一夏みたいなのは俺には出来ないかもしれないけどさ、俺もお前の助けになってやりたいとは思ってるんだぜ？ もっと頼ってくれても良いと思うんだけど、なーんか遠慮されてる気がするんだよね」って寝てる奴に言っても仕方ない、か……お休み、シャルル」

そう言って勝生は、シャルルの頭を一撫でして自分のベッドへともぐった。

なんとか寝たフリを続けることは出来た。頭を撫でられてビツクリしたのを表に出すことも耐えられた。でも……

そんな勝生の言葉と最後の手の感触のせいで頭の中というか心はさらにざわついてきた。顔もまた再燃して真っ赤になっているのが自覚できる。

……今夜はなかなか寝付けない一夜になりそうなシャルルだった。

第14話

結論から言えばはつきり言って拍子抜け、いや特に問題が無かったと評するべきだろう。一夏・シャルルペアは原作通り幕・ラウラペアと戦い、シュヴァルツエア・レーゲンに仕込まれたVTシステムが作動。暴走状態になったラウラを一夏が止め、救出。

ここであえて原作との違いを言えば、俺がフィールド内にいて待機していた点だろうか。より正確に言えばVTシステムが発動し始め、形状を変化させている間にアリーナ内に到着。原作では一夏の左腕を傷つけた一撃を俺が弾き飛ばしたということ、それだけだ。

とりあえずは一段落ついた。そしてこの一件、いやここまでの二件の出来事でこの世界での俺の考え、スタンスは固まった。

——俺は原作を鵜呑みにしない。だが否定もしない。

俺はこの世界が俺の知る原作と全く違う展開を迎えるとは思っていない。正確には俺が変えようとしらない、もしくは変えてしまうような出来事に関わらない限りは、と付くが。そういった点で言えば俺がISを動かしていることは大きすぎる変化といえるだろう。だがそれが世界、社会・政府としての世界に与える変化は殆どないといえる。ISを動かせる男が一人増えたところでどんな変化があるというのか。

つまるところ変化があるのはあの天災一人だ。だがあの天災が俺に関心を持つか、と言われると分からないとしか言えない。そして持たなければ相変わらずこの世界はほぼ原作通り進むだろうし。持ったとしても言わば原作と外伝のごとく俺自身だけに何らかの干渉があり、原作にはまず影響がないだろう。所詮あの天災にとって俺という存在は一夏達とそれ以外の、それ以外でしかないということなのだから。

だからこそ俺は原作と言うアドバンテージを最大限に利用したいと考えている。で、ありながらリアルだからこそ、原作であつたことを鵜呑みにするつもりはない。先に考察のように、この世界が俺というイレギュラーがいなければ、関わっていない事柄であれば、原作通りに進んでいくことを否定するつもりは無い。

ならば、原作を情報として最大限利用しこのリアルをより良きリアルにすることに何の迷いがあるうか、例えそれが俺から見た？より良い？であつたとしても、独善、偽善と言われようとも。俺はこの考えの下に行動する。

今回のことにしても俺が与えた影響なんぞ一夏が左腕を怪我しなかつたぐらいのものだ、だがたつたそれだけでも俺は胸をはってより良き未来を掴んだと言つてやる。だつてそうだろう？ 原作通りなら確かにたいした傷じゃなかったかもしれない、でももしかしたら左腕は切り飛ばされていたかもしれない。それらの可能性を纏めて俺が防いだんだ。誰に何を言われようと俺は自分の行動に胸を張つてやる！

「ふう……」

現在俺は賢者モード……ではなく、先ほどまで大浴場を独り占めしていた。ちなみに位置的には入り口から一番遠い位置だ。肩どころか首まで浸かっているので湯船の半ばまで来なければ湯気に阻まれて俺の姿は確認できないであろう位置にいる。因みに確信犯だ。何が確信犯かと言うと、現在進行形で目の前で展開されているイチヤラブシーンをばっちり見ているということだ。

おーおー、一夏もシャルロットも顔真っ赤にしちゃってかわいいね。てかシャルロットさんや、二人だけのときはって、そこに俺

はいないんですね……。

にしてもアレだな、予想通りといえば予想通りなんだが、山田先生俺が先に入っていること言っていないんだな。まあむしろ全員男だと思ってる先生があえてそれを言うほうが不自然だしな。

——さて、二人もあがったことだし俺もあがるとしますかね……
つつ、うお……流石に長いこと浸かりすぎたか、立ち上がった瞬間視界が暗転しやがった。……よし、視界が戻った、行きますか。

部屋に戻るとカツの姿はなかった。夕飯のときにもいなかったし何処に行ってるんだろう？ でも正直ちよつと助かった。だって今の僕って多分顔赤くなってると思うし。お風呂のこととか聞かれたら……困るし。

髪を乾かしたり、水を飲んだりしていると、カツが部屋に帰ってきた。どうやらカツも大浴場でお風呂に入ってきたみたいだった。僕と一夏の事も聞かれたけど、僕は部屋のシャワーを使ったことにした。

カツは僕がとっさについた嘘に気付いた様子もなく、直ぐに寝巻に着替えてベットにもぐりこんだ。僕もベットに横になって、寝ようとしたんだけど……カツが電気を消すときに言った一言で眠気が全部吹っ飛んでしまった。

そう、カツは僕のほうを向いて、ニヤリと笑ってこう言ったんだ。

「おやすみ、シャルロット」

って。

うわああああ！　なんで、なんで、なんでー！　なんで、カツ

が僕の本当の名前知ってるのさ！　ってどう考えてもお風呂でのと……え？　カツももしかしていた？　それって一夏と僕が一緒にお風呂に入っていたのもみていた？　え？　え？　え？　ええ！？　ちよつとカツ、いまのどういうって……笑ってる！？　電気消してるから、どんな顔してるかわかんないけど、笑い声は聞こえてるからね！　って笑いすぎだよ！！

きつちり全部吐いて貰うからね！　言うまで寝かせないから！　え？　今夜は寝かせないって……いや！　そう意味じゃないから！！　ちよつとカツ！　ああああああ、最初から全部そんなに詳しく話さなくても良いから！　ちょ……やめて！　そそそそんな、生々しく言わなくても良いから！！

あゝん、カツのバカー……………！！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4498r/>

転生者人生録 I S 編

2011年10月8日01時11分発行